

国見町文化財調査報告書(概報) 第3集

いし はら や ふさ
石原遺跡・矢房遺跡

—国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—

2003

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成10年度から平成13年度にかけて実施しました国見中部地区面積整備事業に伴う石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

石原遺跡・矢房遺跡は、国見町のほぼ中央部に位置し、両脇を河川に挟まれたなだらかな丘陵上に所在します。南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生き々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、特に旧石器時代の土石流の発見は、今も昔も火山活動などの自然の脅威に立ち向かっていく人間の強さを感じられます。また、古墳時代の住居跡からは多くの土器がまとまって発見され、当時の人々の生活・文化の解明には欠かせない資料となりましょう。そのほか、中世の墓と考えられる遺構からも完形品の土師器が多数発見されており、当時の人々の葬送に対する精神文化の解明にも一石を投じるものとなるでしょう。

国見町の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、県学芸文化課ならびに関係の皆様に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成15年3月31日

長崎県国見町教育委員会

教育長 原 宮 之

例 言

1. 本報告は1998年～2002年(平成10年度～平成13年度)に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告(概報)である。

2. 調査は、長崎県島原振興局の依頼を受け、国見町が実施した。

3. 調査は国見町教育委員会が担当した。

調査は1997年11月4日から1998年3月31日(平成9年度)に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間発掘調査を実施した。

1998年11月6日～1998年12月21日(平成10年度) 石原1区～4区・矢房1区～2区

1999年5月18日～1999年9月13日(平成11年度) 石原5区～6区・石原8区～10区

2000年3月7日～2000年3月31日(平成11年度) 石原7区、11区・矢房3区

2001年1月11日～2001年3月26日(平成12年度) 矢房4区～19区

2002年3月1日～2002年3月31日(平成13年度) 石原19区～25区

4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教 育 長	阿比留 亨(平成10年度～平成12年度)
	同	教 育 長	原 宮之(平成12年度～現在)
	同	教 育 次 長	松本 安央(平成10年度～平成11年度)
	同	教 育 次 長	吉田 正昭(平成12年～現在)
	同	社会教育係長	江副俊一郎(平成10年度～平成13年度)
調査担当	同	教 育 次 長	松本 安央(平成10年度)
	同	文化財調査員	松崎由紀子(平成10年度～平成11年度)
	同	社会教育係	辻田 直人

5. 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東文子・林繁美・松崎・辻田が行い、遺物の実測・製図は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井恵・竹中哲朗(文化財調査員、平成14年度～)・辻田が行った。写真は現地調査を松崎・辻田が、遺物写真は竹中・辻田が行った。

6. 遺構実測の一部は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

7. 火山灰検出・年代測定業務は(株)古環境研究所に委託した。

8. 空中写真撮影業務は(株)文化財環境研究所(現㈱九州文化財研究所)に委託した。

9. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

10. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標はI系による。

11. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。橋昌信(別府大学)、松藤和人(同志社大学)、佐川正敏(東北学院大学)、小畠弘己(熊本大学)、木村幾多郎(大分市歴史資料館)、平川 南(国立歴史民俗博物館)、長岡信治(長崎大学教育学部)、佐藤良二(二上山博物館)、早田勉(古環境研究所)、中川和哉((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)、絹川一徳(大阪市文化財協会)、森川実、水ノ江和同(福岡県総務部国際博物館対策室)、大坪芳典(佐賀県教育委員会)、宮崎範行(熊本県教育委員会)、大野薫(大阪府教育委員会)、黒川忠弘(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、宮田浩二(宮崎県串間市教育委員会)、萩原博文(平戸市教育委員会)、川道寛(長崎県芸芸文化課)、古門雅高(長崎県教育委員会)、渡邊康行(埋蔵文化財サポートシステム)、宇土靖之(長崎県有明町総合文化会館)、遠部慎(長崎県南串山村教育委員会)、福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会(敬称略・順不同)

12. 本書の執筆は竹中哲朗・辻田直人が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。

13. 本書の編集は竹中・辻田による。

目 次

巻頭図版
発刊にあたって
例言
本文目次
挿図目次
表目次
図版目次

第1章 調査の経緯	1 p
第1節 発掘調査にいたる経緯（辻田）	第2節 国見中部地区試掘調査（竹中）
第3節 発掘調査の方法及び経過（辻田）	
第2章 遺跡の立地	6 p
第1節 国見町の概要（辻田）	第2節 地理的・歴史的環境（辻田）
第3節 層位（辻田・竹中）	
第3章 旧石器時代	8 p
第1節 土石流（辻田）	第2節 出土遺物（辻田）
第4章 繩文時代	15 p
第1節 土坑・溝（竹中）	第2節 土偶・土器・石器（辻田・竹中）
第5章 古墳時代	39 p
第1節 住居跡・土坑墓（竹中）	
第6章 古代	45 p
第1節 土坑・溝・骨蔵器（竹中）	
第7章 中世	55 p
第1節 土坑・製鉄炉（竹中）	第2節 捩立柱建物・道・堀・溝（竹中）
第3節 古代から中世の特徴的な遺物（竹中）	
第8章 まとめ	71 p
第1節 旧石器時代について（辻田）	第2節 繩文時代について（辻田）
第3節 矢房遺跡検出の古墳時代住居跡出土土師器（竹中）	
第4節 石原遺跡検出の古代土坑（竹中）	第5節 矢房遺跡検出の中世土坑墓（竹中）
付 猪之瀬遺跡中世土坑墓報告（91～93 p）	
第9章 自然科学分析	94 p
第1節 石原遺跡の土層とテフラ	第2節 放射性炭素(¹⁴ C)年代測定結果

挿 図 目 次

第1図 石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)	
第2図 TP 8 土坑出土遺物実測図(1/3) 1	
第3図 TP 8 土坑検出状況・出土遺物検出状況 (1/40-1/10) 2	
第4図 試掘調査トレンド設定図(1/5,000) 3	
第5図 調査区配置図 5	
第6図 石原遺跡基本土層図 7	
第7図 矢房遺跡基本土層図 7	
第8図 石原遺跡24区土石流検出状況① 8	
第9図 石原遺跡24区疊層下堆積状況 8	
第10図 石原遺跡24区土石流検出状況② 8	
第11図 石原遺跡出土後期旧石器時代の石器 (2/3) 9	
第12図 石原遺跡 a～e 区旧石器時代遺物分布 図(1/80) 11	
第13図 石原遺跡 a～e 区出土旧石器時代の石 器(2/3) 13	
第14図 石原遺跡24区XII層出土石器(2/3) 14	
第15図 石原遺跡層位外出土遺物(2/3) 14	
第16図 石原遺跡19区 SK02(1/20) 15	
第17図 石原遺跡19区 SK02・SD01出土遺物 (1/3-1/2) 16	
第18図 石原遺跡19区 SD01(1/20) 17	
第19図 石原遺跡19区 SD01出土石器 (1/3-2/3) 18	
第20図 石原遺跡22区・西壁 SD01セクション 図(1/40) 18	
第21図 石原遺跡22区 SD01(1/40) 19	
第22図 石原遺跡出土縄文時代早期土器① (1/2) 22	
第23図 石原遺跡出土縄文時代早期土器② (1/2) 23	
第24図 石原遺跡23区第Ⅳ層遺物分布図(1/60) 23	
第25図 石原遺跡 3 区縄文時代早期遺物分布図 (1/60) 23	
第26図 石原遺跡出土縄文時代早期土器③ (1/2) 24	
第27図 石原遺跡出土縄文時代早期土器④ (1/2) 25	
第28図 石原遺跡出土縄文時代早期土器⑤ (1/2) 26	
第29図 矢房遺跡出土縄文時代早期土器 (1/2) 26	
第30図 石原遺跡 5 区出土縄文時代前期土器 (1/2) 29	
第31図 石原遺跡 5 区出土遺物分布図(1/60) 30	
第32図 石原遺跡 5 区出土 その他の縄文時代土器(1/2) 30	
第33図 石原遺跡 9 区出土縄文時代土偶 (1/2) 32	
第34図 石原遺跡出土縄文時代晩期土器① (1/2) 33	
第35図 石原遺跡出土縄文時代晩期土器② (1/3-1/2) 34	
第36図 石原遺跡出土縄文時代早期石器 (2/3) 35	
第37図 石原遺跡5区出土縄文時代前期及び後 期石器(2/3-1/2) 36	
第38図 石原遺跡・矢房遺跡出土縄文時代晩期 石器(2/3-1/2) 37	
第39図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡平面・セ クション図(1/30) 39	
第40図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ①(1/3) 41	
第41図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ②(1/3) 42	
第42図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ③(1/3) 43	
第43図 矢房遺跡16区土坑墓(1/40) 44	
第44図 石原遺跡 8 区 Pit01・出土遺物 (1/10-1/3) 45	
第45図 石原遺跡 8 区 SK01 (1/20) 46	
第46図 石原遺跡 8 区 SK01出土遺物 (1/3-1/2) 47	
第47図 石原遺跡 8 区 SK02(1/20) 48	

第48図	石原遺跡8区 SK02出土遺物(1/3)	49
第49図	石原遺跡24区 SK01(1/10)	51
第50図	石原遺跡24区 SK01出土遺物(1/3)	51
第51図	矢房遺跡4区 骨蔵器検出状況写真	52
第52図	矢房遺跡4区出土遺物(1/3)	52
第53図	矢房遺跡12~13区 SD01出土遺物 (1/3)	53
第54図	矢房遺跡12~13区 SD01(1/40)	53
第55図	矢房遺跡3区 SK01(1/20)	55
第56図	矢房遺跡9区 SK01・配石・出土遺物 (1/40・1/3)	56
第57図	石原遺跡19区 SK01・出土遺物(1/40- 1/3)	57
第58図	石原遺跡10区 SK01 一製鉄炉— (1/40)	58
第59図	石原遺跡10区 SK01出土遺物(1/3)	59
第60図	石原遺跡24区 Pit列(1/40)	60
第61図	石原遺跡24区 Pit内出土遺物(1/3)	60
第62図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群 (1/200)	61
第63図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群SB 01~04(1/400)	62
第64図	石原遺跡4・8~10区 SB01(1/100)	63
第65図	石原遺跡4・8~10区 SB02(1/100)	63
第66図	石原遺跡4・8~10区 SB03(1/100)	64
第67図	石原遺跡4・8~10区 SB04(1/100)	64
第68図	石原遺跡6区道路・区画造構(1/100)	65
第69図	石原遺跡20区 SD01・SD02(1/80)	67
第70図	石原遺跡出土墨書・刻畫土器(1/3・1/1)	68
第71図	石原遺跡・矢房遺跡出土青磁片・石製品 (1/3・1/2)	68
第72図	古代から中世の特徴的な遺物(1/3)	69
第73図	石原遺跡a-e区遺物分布図(1/160)	73
第74図	縄文時代早期壺形土器一覧図(1/6)	77
第75図	長崎県諫早市下峰原高場遺跡壺形土器 (1/2)	78
第76図	島原半島検出の住居跡出土土器の様相 (1/6)	85
第77図	大野原遺跡・七反畑地区廐棄土坑出土 遺物(1/6)	89
第78図	今福遺跡2号木棺・林ノ辻遺跡2号土 坑(1/40)	91
第79図	猪之瀬遺跡土坑・出土遺物実測図 (1/40・1/3)	93
第80図	自然科学分析図	95

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	4
第2表	旧石器時代出土石器計測表	14
第3表	石原遺跡19区 SK02・SD01 出土土器観察表	20
第4表	縄文時代早期土器観察表	27
第5表	縄文時代前期土器観察表	31
第6表	縄文時代晚期土器観察表	34
第7表	石原・矢房遺跡出土縄文時代 石器計測表	38
第8表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表①	42
第9表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表②	43
第10表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表③	44
第11表	石原遺跡8区 Pit01・SK01 出土土器観察表	50
第12表	石原遺跡8区 SK02・24区 SK01, 矢房遺跡4区・12~13区 SD01 出土土器観察表	54
第13表	中世土師器坏・皿法量計測表	59
第14表	掘立柱建物計測表	62
第15表	石器集中地点器種別及び石材別集計表	72
第16表	石器石材分類表	74
第17表	早期壺形土器集成図使用実測図引用ヶ 所一覧	79
第18表	島原半島検出中世土坑	90

図 版 目 次

卷頭図版①	①遺跡遠景 ②旧石器時代の石器 ③矢原遺跡10区 SK01 (製鉄炉) ④矢原遺跡中世 土坑墓・配石
卷頭図版②	①石原遺跡 旧石器時代遺物出土状況
卷頭図版③	矢原遺跡16区 ①古墳時代中期住居跡 ②古墳時代中期住居跡出土土師器
卷頭図版④	矢原遺跡 9 区 ①中世土坑墓 ②中世土坑墓出土土師器 ③石原遺跡出土墨書・刻畫土器
図版 1 遺跡上空写真(昭和35年度国土地理院)	石原遺跡 8 区 Pit 検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK01検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02検出状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02半堀状況 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02セクション 105
.....	石原遺跡 8 区 SK02完掘状況 105
図版 2 石原遺跡19区調査風景	石原遺跡 8 区 SK02遺物出土状況 106
.....	石原遺跡24区 SK01検出状況①~③ 106
矢原遺跡14区土層
.....	石原遺跡24区 SK01セクション①~② 106
石原遺跡24区土層
.....	石原遺跡24区 SK01完掘状況 106
石原遺跡24区旧石器(AT直上)遺物 出土状況
.....	石原遺跡24区 Pit 列検出状況 106
石原遺跡22区土層(縄文時代晚期)
.....
石原遺跡 a~e 区土層
.....
石原遺跡 e 区遺物出土状況
.....
石原遺跡 b 区遺物出土状況
.....
図版 3 石原遺跡 b 区ナイフ形石器出土状況
.....
石原遺跡24区縄文時代早期土器出土状 況
.....
石原遺跡19区 SD01検出状況
.....
石原遺跡19区 SD01遺物出土状況①~ ④
.....
石原遺跡19区 SD01完掘状況
.....
図版 4 石原遺跡19区 SK01検出状況①~③
.....
石原遺跡19区 SK01完掘状況
.....
石原遺跡22区 SD01検出状況
.....
矢原遺跡16区住居跡検出状況①~②
.....
矢原遺跡16区住居跡遺物出土状況①~④
.....
図版 5 矢原遺跡16区住居跡遺物出土状況②~105
.....
矢原遺跡16区土坑墓
.....
図版 6 石原遺跡 8 区 SK02遺物出土状況	106
.....
石原遺跡24区 SK01検出状況①~③
.....	106
石原遺跡24区 SK01セクション①~②	106
.....
石原遺跡24区 SK01完掘状況	106
.....
石原遺跡24区 Pit 列検出状況	106
.....
図版 7 石原遺跡24区 Pit 列完掘状況	107
.....
矢原遺跡12・13区 SD01検出状況	107
.....
矢原遺跡12・13区 SD01検出状況	107
.....
矢原遺跡12・13区 SD01須恵器出土状 況①②	107
.....
矢原遺跡 3 区 SK01検出状況	107
.....
矢原遺跡 3 区 SK01セクション	107
.....
矢原遺跡 3 区 SK01完掘状況	107
.....
図版 8 矢原遺跡 9 区 SK01検出状況①~②	108
.....
矢原遺跡 9 区 SK01遺物出土状況①~②	108
.....
矢原遺跡 9 区 SK01完掘	108
.....
矢原遺跡 9 区 配石	108
.....
石原遺跡19区 SK01検出状況	108
.....
石原遺跡19区 SK01完掘	108
.....

図版 9 石原遺跡10区 SK01①～⑥	109
石原遺跡20区 SD02①～②	109
図版10 矢房遺跡住居跡と土坑墓	110
矢房遺跡 9 区土坑墓と配石	110
石原遺跡 4 区・8～10区 掘立柱建物群	110
石原遺跡 SB01	110
石原遺跡 SB03・04	110
石原遺跡 6 区道路・区画遺構	110
図版11 旧石器時代の石器①	111
図版12 旧石器時代の石器②	112
図版13 石原遺跡縄文時代早期土器①	113
図版14 石原遺跡縄文時代早期土器②	114
図版15 石原遺跡縄文時代早期土器③	115
図版16 石原遺跡 5 区縄文時代前期土器	116
図版17 石原遺跡19区 SD01出土縄文土器	117
石原遺跡縄文時代晚期土器	117
図版18 石原遺跡出土縄文時代土偶	118
縄文時代の石器	118
図版19 矢房遺跡16区住居跡出土土器①	119
図版20 矢房遺跡16区住居跡出土土器②	120
図版21 TP 8 土坑出土土器, 石原遺跡 8 区 Pit01出土土器	121
図版22 石原遺跡 8 区 SK01,8区 SK02出土土器	122
図版23 石原遺跡 4 区・矢房遺跡 9 区 SK01・配石出土土器	123
図版24 石原遺跡10区 SK01・ 古代から中世の特徴的な遺物	124



第1図 石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)

(3) 繩文時代石器

石原遺跡出土早期石器（第36図・第7表）

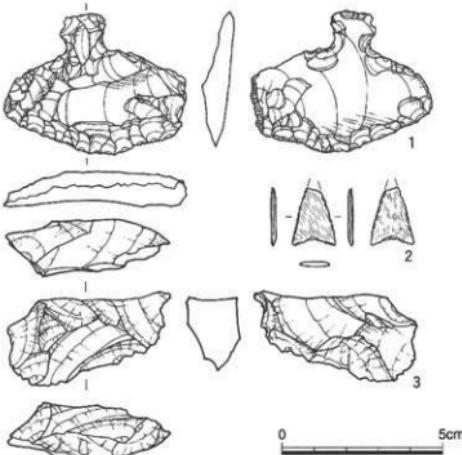
早期では土器に比べると石器の検出数が非常に少ない。しかも、晩期の包含層などに混入しているものばかりで、正確には繩文時代早期と想定される石器である。1は青灰色黒曜石製の石匙である。礫面を直接打面として剥離された剥片を素材とし、辺縁部に丁寧な剥離によって調整を施す。背面の先行する剥離痕から、同一方向に連続して剥片剥離を行って素材を剥離していることが伺える。2は玄武岩製の磨製石鎌で、表面は風化により真っ白に変色している。浅い抉りをもつ二等辺三角形状の石鎌で、厚さは非常に薄く仕上げられている。周縁部には若干剥離痕を残しており、全面が研磨されているわけではない。3は玄武岩製の石核で、石鎌と同じく白く風化する。周縁や下縁及び上面の平坦面からの剥離で寸詰まり状の剥片を剥離している。その形状から、福岡県柏原F遺跡に見られる柏原型石核の範疇に入る資料である。この資料については近年早期以外の時期でも検出が報告されている（福田・高原2001）が、本資料は前述の石原19区検出の溝状遺構（阿高系土器出土）調査後にさらに下位から検出されたものであり、早期の資料ととらえておく。

（辻田）

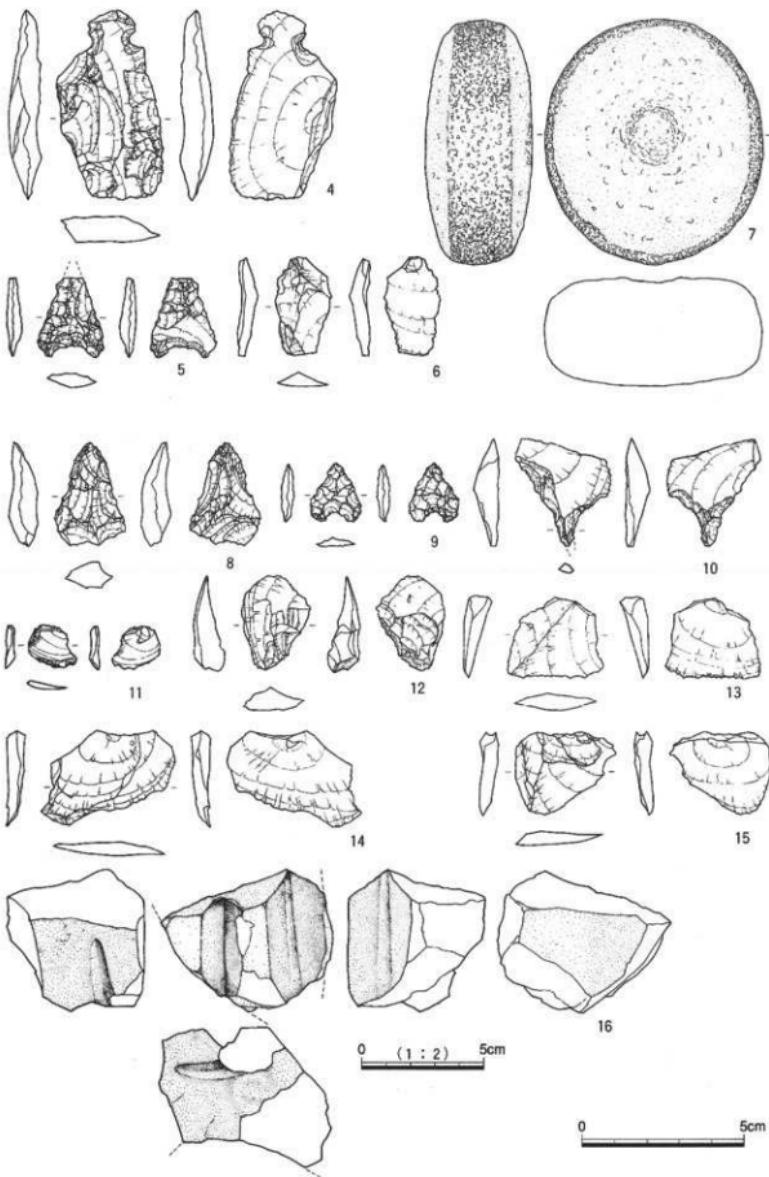
石原5区出土石器（第37図・第7表）

森B式土器包含層（第37図4～7）および後期と想定される土坑より出土（第37図8～16）している。森B式土器包含層出土石器は数が少なく概期の石器組成について言及するには至らない。また、二次的な堆積層ということも頭に入れておかねばならない。4は玄武岩製の石匙で厚手の幅広剥片を素材としており、背面側のみに粗い調整で成形している。5は玄武岩製の石鎌で先端部を欠損する。背面側は全面に調整を行うが、主要剥離面側は一部のみである。6は玄武岩製の剥片で、石鎌等の素材であろうか。7は中央部に若干凹みのある磨石で近在の角閃石安山岩製である。厚い円盤状を呈し、周縁部は使用による痕跡が顕著である。

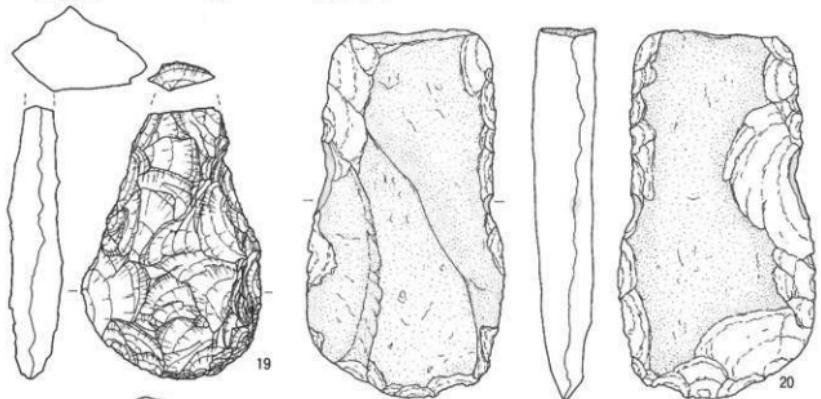
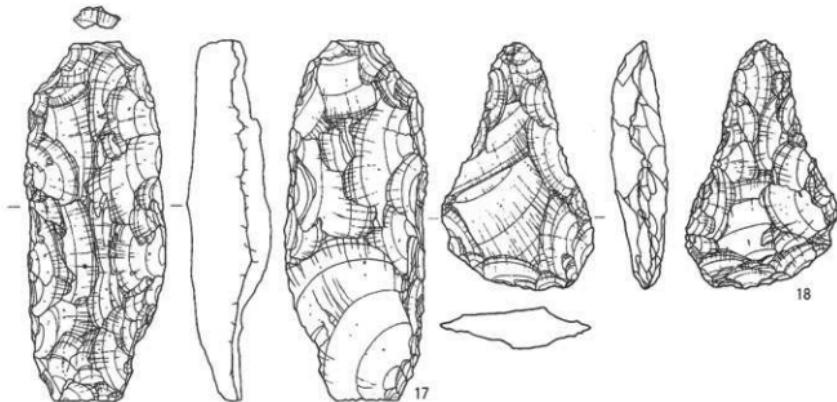
後期と想定される土坑（第31図SK01）から出土した石器は比較的の数が多い。剥片類が主な出土資料だが、打面を固定せずにずんぐりした素材剥片を剥離するという共通する剥片剥離技術の存在が見て取れる。10・13～15がそれにあたる。また、石材には玄武岩が多く使用されている。8、9は石鎌で、8は玄武岩製、9は黒曜石製である。いずれも調整は粗く厚みのある資料である。10は石錐で先端部を若干欠損する。やや厚みのある剥片を素材としており、表裏面からの細かい調整で先端部を作り出している。先端部を作り出す以外の調整剥離は見られない。11は小形の剥片であるが、下縁に使用によるものか細かい剥離が見られる。12は右側縁から表裏面に粗い調整を施した厚みのある剥片である。13～15はほぼ同様のやや厚みのある剥片で10の石錐などの剥片石器の素材となるものであろう。16は砂岩製の有溝砥石である。表面と左右の側面に溝部分があるが表面の溝がもっとも顕著である。



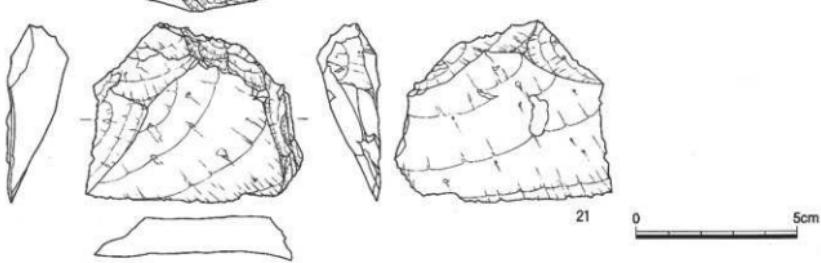
第36図 石原遺跡出土繩文時代早期石器(2/3)



第37図 石原遺跡5区出土縄文時代前期及び後期石器(2/3-1/2)



0 (1 : 2) 5cm



第38図 石原遺跡・矢房遺跡出土縄文時代晚期石器(2/3・1/2)

第7表 石原・矢房遺跡出土縄文時代石器計測表

図 番 号	遺跡	区	層位	器種	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
1	石原	8	晚期包含層	石匙	青灰色黒曜石	4.4	5.5	1.0	18.6	
36	2	石原	10	晚期包含層	磨製石鏟	玄武岩	1.8	1.3	0.2	0.2 周縁部未研磨
3	石原	b	VII a	柏原懸石核	玄武岩	5.0	2.9	1.7	21.4	
4	石原	5	III	石匙	玄武岩	6.8	4.0	1.0	17.1	
5	石原	5	III	石鏟	玄武岩	2.4	2.0	0.5	2.3	
6	石原	5	III	剥片	玄武岩	3.0	1.7	0.5	2.1	
7	石原	5	III	磨石(凹面)	角閃石安山岩	10.0	8.9	4.4	662.0	
8	石原	5	SK-2	石鏟	玄武岩	3.1	2.1	1.0	4.5	
9	石原	5	SK-2	石鏟	黒曜石	1.8	0.4	1.5	1.0	
10	石原	5	SK-2	石錐	玄武岩	3.3	2.9	0.8	3.5	
11	石原	5	SK-2	使用痕のある剥片	黒曜石	1.3	1.5	0.3	0.8	
12	石原	5	SK-2	調整痕のある剥片	玄武岩	2.4	2.1	1.0	3.7	
13	石原	5	SK-2	剥片	玄武岩	2.4	2.9	0.7	4.0	
14	石原	5	SK-2	剥片	玄武岩	2.9	3.8	0.6	4.7	
15	石原	5	SK-2	剥片	玄武岩	2.5	3.1	0.6	3.2	
16	石原	5	SK-2	有溝砥石	砂岩	4.3	4.2	4.2	66.4	3面にわたり使用痕跡
17	石原	10	晚期包含層	両面加工石器	玄武岩	9.7	3.7	2.3	125.7	刃部欠損
18	石原	8	晚期包含層	両面加工石器	玄武岩	7.7	4.9	1.8	49.4	刃部は非常に摩滅
19	矢房	10	晚期包含層	両面加工石器	玄武岩	8.3	5.5	1.7	71.0	上部欠損
20	石原	11	晚期包含層	扁平打製石斧	安山岩	15.0	8.0	2.5	373.3	着柄痕?
21	石原	4	晚期包含層	調整痕のある剥片	安山岩	5.5	6.4	1.8	51.1	

また、表面の溝は中央部分右側に段を持つ。裏面は凹レンズ状に大きなカーブで窪んでおり、何らかの研磨に使っていた痕跡が伺える。

石原遺跡・矢房遺跡出土晚期石器（第38図17～21・第7表・図版18）

晚期の石器は土器とともに多く検出されているが、今概報では特徴的な資料のみ報告する。17～19は両面調整石器とした。大形で厚手の玄武岩剥片を素材として、表裏面から丁寧な調整で全体の形を整えている。17は両側縁が並行するように、18・19は下彫れ状の洋ナシ形である。いずれも下縁が刃部と想定されるが、17は先端部を大きく欠損しておりその詳細は不明である。18・19は意識的に刃部を丸く仕上げるように細かい調整を行っている。また、18の刃部は使用によるものであろう摩滅が顕著に見られ、刃部周辺は非常に滑らかである。このような石器は近年、隣町の長崎県有明町大野原遺跡（諫見2001）において多く検出されており、「鎧状石器」と報告されている。時期は石原遺跡・矢房遺跡よりも遅るが、同様の資料と理解したい。大野原遺跡の資料を実見（註1）させていただいたが、石原遺跡・矢房遺跡のものと違和感なく、また、特に18のような刃部に摩滅痕を有する資料が大野原遺跡でも多数検出されており、島原半島における縄文後期・晚期の遺跡に普遍的に存在する石器と考えられる。20は安山岩製の扁平打製石斧で、もともと薄い板状の安山岩砾を素材とし、周縁部に調整を施した資料である。両側縁中央部（アミ部分）は摩滅しており、着柄等の痕跡と想定される。21は安山岩製の剥片で、主要剥離面側からの剥離で打面が除去されている。

（辻田）

参考文献

- 小畠弘己1983「2.剥片剥離と石鏟の分析」『柏原遺跡群I』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集
 謙見富士郎編2001「大野原遺跡」有明町文化財調査報告書 第12集 長崎県有明町教育委員会
 高原 愛編2001「平野遺跡」長崎県文化財調査報告書 第160集 長崎県教育委員会

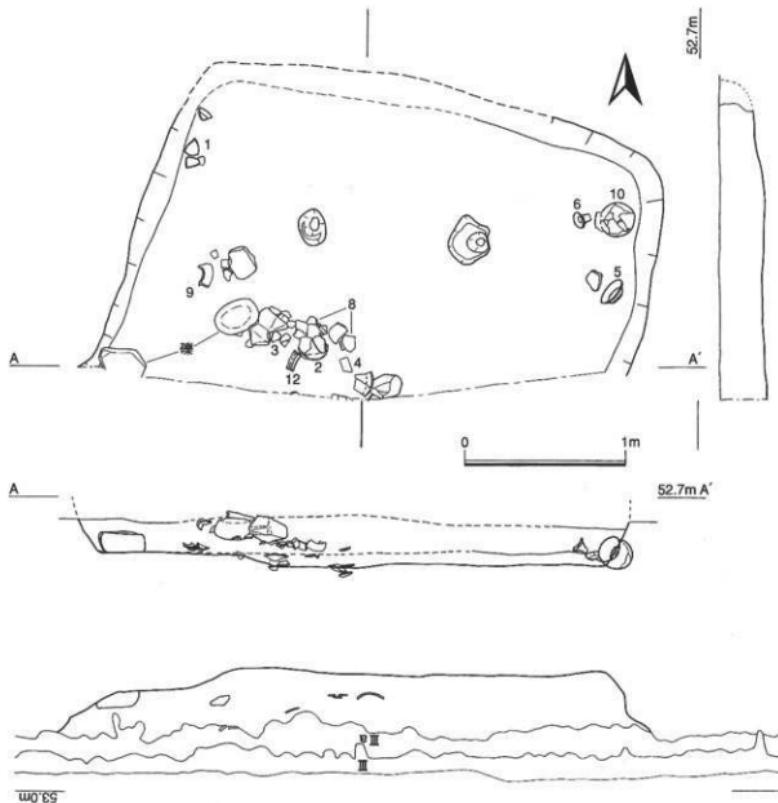
（註1）長崎県有明町教育委員会宇土靖之氏のご好意により実見させていただいた。

第5章 古 墳 時 代

第1節 住居跡・土坑墓

矢房16区 SB01 (第39図・巻頭図版3・図版4~5)

検出面では東西3m18cm、南北2m20cm以上を測る。平面プラン隅丸方形の対角線上に柱穴をもつ竪穴住居跡である。覆土は分層できず一層のみである。北壁の西半分は搅乱により失われているため、補助線により示しておいた。南壁は調査区外に当たるため検出できなかった。検出面からの深さは約20cmを測り、柱穴の位置は西壁より約88cmの位置に一つ、東壁より約95cmの位置に一つ合計二本検出した。柱穴間隔は心々間で1m3cmを測り、そのラインは住居跡東壁にはば直行する。いずれの柱穴も住居平面プランの対角線上に位置しており、四本柱の構造に復元できる。柱穴規模は西側のものが平面プラン円形で直径約15cm深さ27cm、東側も平面プラン円形で直径約17cm深さ約41cmを測る。柱痕



第39図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡平面・セクション図(1/30)

跡は確認できなかったが、底面平坦面は直径が5～6cmの円形を呈している。覆土中・床面上から炭化材や炭化物・焼土などは検出されず、調査区外に炉もしくは窯が存在するのかもしれない。雲仙産角閃石安山岩の自然礫が6点検出されたが、使用痕跡・被熱跡などは認められなかった。しかし、拳大のものから人頭大のものまであり、居住に関わる何らかの目的で使用されていたものが土器・土器片とともに廃棄された住居の落ち込みに入れ込まれたものであろう。(註1) (竹中)

遺物の出土状態（第40図・巻頭図版3・図版4～5）

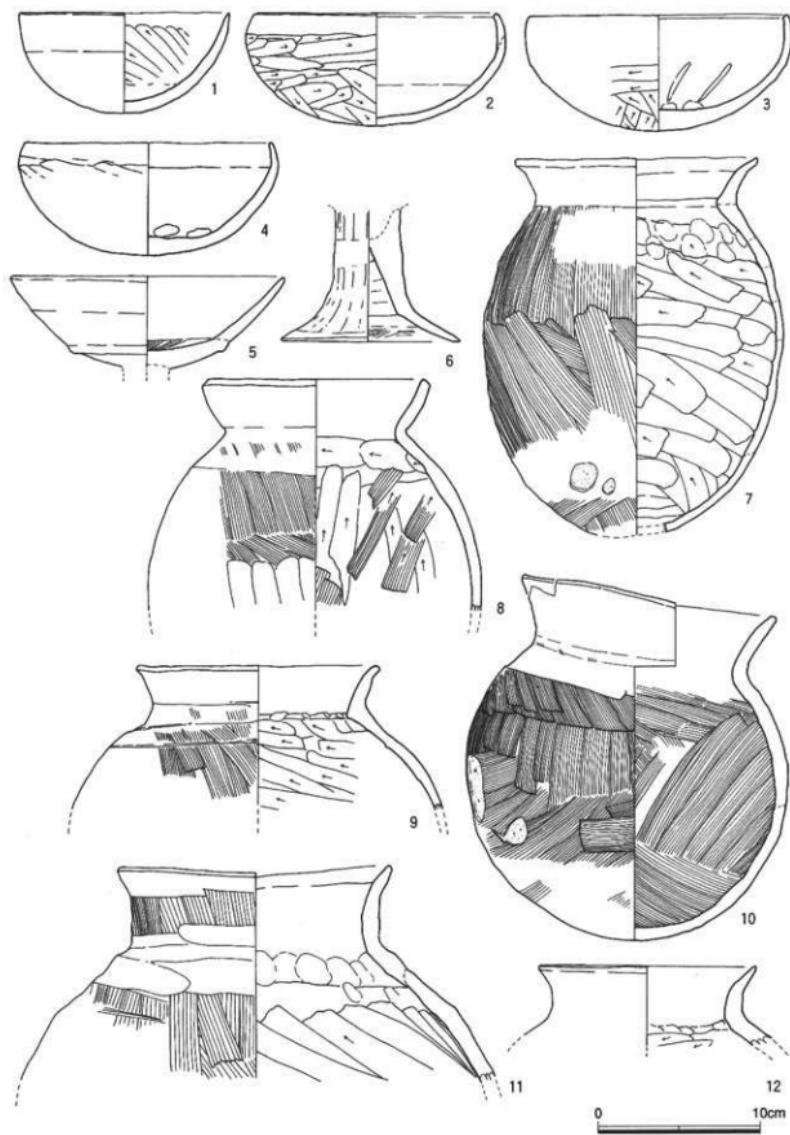
遺物の出土は比較的多く、東北コーナー近くで壺（10）高坏（5・6）が、中央西寄りで甕（8・9・12）坏（2・3・4）、北西コーナー近くで坏（1）がそれぞれ破片となり、まとまった状態で出土している。完形品近くに復元できたものを第40図に示した。坏（1～4）は、ほぼ完形品に復元でき、5は高坏で脚部を失い、6も高坏で坏部を失っている。8・9・11・12は口縁部のみは全周するまでに復元できた。その他、覆土から出土した破片により7が口縁部の一部と底部中央以外はほぼ完形品に復元された。第42図13～21は構築覆土より出土した破片資料による実測図である。図示しなかった他に、中央西寄りから壺胴部が3点出土しており、検出された甕は合計で10点を数える。甕については覆土中から多くの破片がみられるので、10個体以上の存在が想定できる。坏は9点を図示しておいたが、他に多くの破片があり、相当数の坏が存在したようである。それに対して高坏は2点のみ（第40図5・6）で他には破片すら出土していない。さらに壺は覆土出土の多数の破片資料中にも見当たらなかった。第42図18に示した坏の脚部も1点のみを確認したにすぎない。また、手捏土器は第42図に示した破片資料のみである。出土数の少ない器種で破片資料であるものは本住居跡に伴うものでない可能性が高く、注意せねばならない。

(竹中)

矢房16区SB01出土遺物（第40～42図・第8～10表・図版19～20）

1～12は住居跡の構築実測の際にその位置や状態を記録した出土土器である。番号はそのまま住居跡平面図（第39図）に対応する。

1は土師器坏ではほぼ完形な形で出土している。口縁端部は直立し、丸みのある胴部で深みのある形態を呈する。外面口縁部下2.5cm程までは横方向の丁寧なナデ、それ以下は不定方向のナデ、内面は全体的な横ナデのあと中心から外へへラ削りが施される。2は土師器坏ではほぼ完形に復元できた。大きく深めで口縁端部が丸く内湾して、比較的深みのある底の丸い形態である。外面底を中心に大きな黒斑が見られ、二次的な火を受けている様子である。3は土師器坏で、丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は直立する。底部内面中央に先端の丸い棒状のものによるへラ描きがある。4は土師器坏で、丸い底面から緩やかに立ち上がり、口縁部は端部が内傾する。底部内面中央にへラ状工具による放射状の圧痕があり、底部はその周辺を指オサエによる調整を施してありやや分厚くなる。5は土師器高坏部で内外面とも刷毛目調整・ヘラミガキ・横ナデなどでより調整され、器面はなめらかである。きめ細かい生地で、金雲母粒・赤色砂を含んでいる。比較的小型の高坏である。6は土師器高坏脚部で1/3の高さより裾が開く。外面は上から下へ面取りが行われ、そのあと指による横ナデが施される。7は土師器甕で丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がり口縁部より約10.5cm下に胴部最大径を持つ。肩は張らず、口縁部は「く」の字にひらき、口唇部で強く外反する。外面上半を縱位の刷毛調整、下半を斜位主体に刷毛調整。外面は調整が摩擦で消えている部分と、丸く剥落する部分とがあり、いずれも火にかけられていたことが要因であろう。底に近い部分は摩擦による調整消失がないので、支脚などによって支えられていたと考えられる。8は土師器甕で破片資料による復元である。口縁部上半が内傾する点が特徴で、胴部最大径は口縁部径に比べ大きく、胴の張る体部である。9は土師器甕で口縁部が7と同様に罐部が強く外反する。外面刷毛調整のあと肩部は回転利用の



第40図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物①(1/3)

横ナデが施される。胸部内面はヘラ削りであるが、頸部内面は指頭によるオサエである。10は土師器壺で底部から胸部にかけて丸みをおびて立ち上がり球体に近い印象を受ける。口縁は緩やかに外反し口唇部内面に不明瞭ながら段を持つ。外面は刷毛調整のあと頸部以下約1.5cmまで丁寧な横ナデで仕上げる。底部外面付近は摩滅し刷毛調整痕が消えており、これも火にかけて使われていたのであろう。

内面は胸部上半に横位の刷毛調整、その

後胴中央部から胴下半部にかけて縱刷毛、底部は不定方向の刷毛調整である。外面は被熱のため赤色に変化している部分が多い。11は土師器壺でナデ肩になり頸部が直立し、口縁端部は強く外反する。12は土師器壺で内面は頸部で指頭によるオサエ、以下はヘラ削りである。外面は横ナデによる。

第42図13~19は破片資料であるが、図示した部位は全周するまでに復元できた資料である。

13は土師器壺で口縁端部が内湾する。外面は中位以下が不定方向のヘラ削りで、上位は横方向のヘラ削り。14は土師器壺で内湾する口縁部をもち、外面口縁部は横ナデ、中位以下はヘラ削りを施す。非常に器壁が薄く精製された胎土である。15は土師器壺であるが、深みをもち底部は尖り気味である。外面は全体的に横ナデが行われたあと、口縁部約1.5~2cm下より長いストロークで手持ちヘラ削りが施される（底部から左回り）。外面からの焼成後の穿孔2ヶ所あり。内面は口縁下約3.5cm程まで横ナデ、それ以下は不正方向のナデである。16は土師器壺で口縁部が外反する形態で、口唇端部が外反する。17は土師器壺で丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。18は土師器有台壺の脚部である。壺部に対して小ぶりな脚部で、調整・成形が粗雑である。19は土師器壺で口縁端部が外反し端部が強く広がる。口縁部内面下半に刷毛調整が認められるが制止しながら調整している。20・21は手捏土器である。内外面ともに指頭によるおさえが均等に行われており、20の口縁端部は水平に外反する。

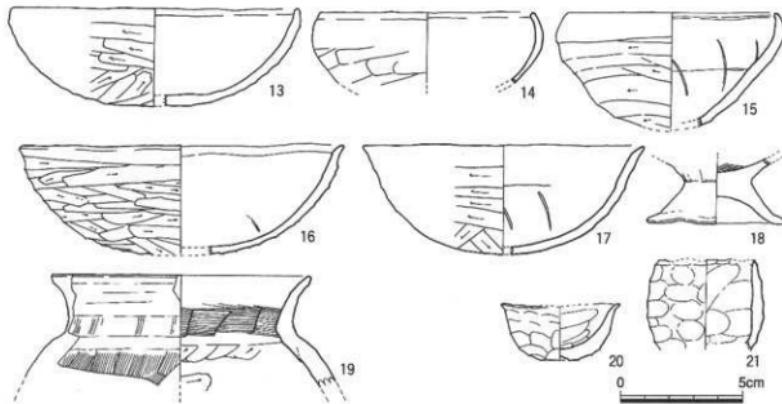
(竹中)

(註1) 群馬県黒井峯遺跡では拳大の環は壁に架けられた筵の鍼として吊り下げられていたという。

群馬県北群馬郡子持村教育委員会1990『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村文化財報告第11集

第8表 矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表①

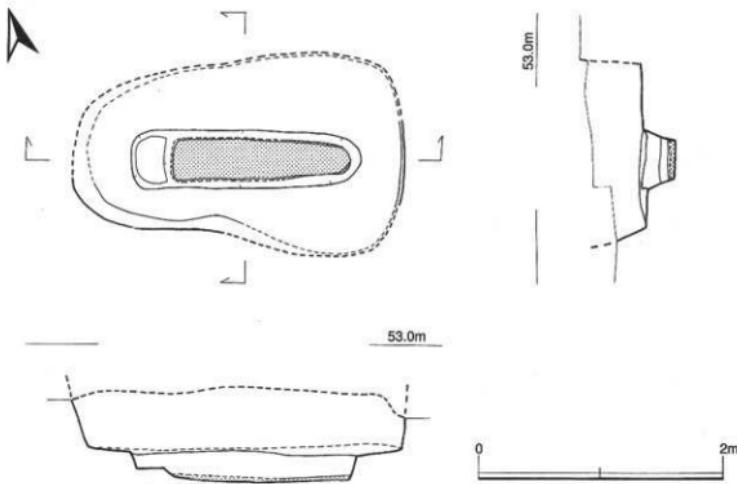
回	番号	種別	法 量(cm)	形態的特徴	技術的特徴	胎土/色調	備 考
1	1	土師器 壺	高さ 口縁部径 6.2 13	口縁部は直立し、 丸みのある部分で深 みのある壺	外壁、口縁下2.5cm程度までは 不定方向の「東なじ」ナデ、それ以 下は不定方向のナデ	金雲母・角閃石を多く含み、白 色（2~3度角）が目立つ	口縁外壁に一部黒斑が見ら れる
2	2	土師器 壺	高さ 口縁部径 6.9 15	大きく深めの环 「縦筋強めが丸く内湾 して、比較的深みの ある底の丸い环	外壁 上半は手持ちヘラ削り、 下半は不定方向のヘラ削り	金雲母・角閃石を多く含み、白 色（2~3度角）が目立つ	外表面を中心に大きな黒斑が 見られ、二次的な火を受けて いる様子
3	3	土師器 壺	高さ 口縁部径 7.1 16.2 16.6	丸みを帯びた底部か ら緩やかに立ち上 がる、口縁部は直立す る	外面 底部は不定方向のヘラ削り、 口縁部より窓部のヘラ削り 全体にやや斜材状に 窓部を斜めに窓部を斜めに を行い、「波紋」が見受けられる	微量の金雲母・角閃石・砂粒を含 む にぶい黄褐色10YR7/2~7/4、 褐色10YR6/1~4/1	底部中央に先端の丸い棒状の ものによるヘラ搔きあり
4	4	土師器 壺	高さ 口縁部径 (微元往) (側部最大径) 6.9 15.2 16	丸い底面から緩やか に立ち上がり、口縁 部は直立するが、や や内傾する	外面 底部は不定方向のナデ、肩 部は左回転の波状状の横ナデ 内面 底部中央にヘラ状工具によ る直射状の痕あり	微量の金雲母・角閃石を含む きの細かいしっかりした胎土 褐色5YR6/8	



第42図 矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物③(1/3)

第9表 矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表②

番号	種別	法量(cm)	形態的特徴	特徴的特徴	胎土/色調	備考	
5	土器器 高坏 坏部片	残存高 口縁部径 深さ	6.5 17 4.5	坏部外面には明瞭な 稜線がみられる。	内外面とも刷毛目調整。ヘラ ミガキ、横ナデにより調整され、器部はなめらかである	きめ細かい生地で、金雲母 粒・赤色粉を含んでいる。 外面は黄褐色7.5YR 8/4 内面はくびれ橙色5YR 7/4	
6	土器器 残存高 脚部のみ	8.2 11.2	2/3の高さまでは ほぼ直に、1/3 の高さより擦が開く	外面 上から下への画取りが行 われたその上から擦による横ナデ 内面 脚部内面は刀子工具に よる一気ごとに凹へ抜く削り	白色粒が目立つ 黄褐色7.5YR 8/8を基調と する。要部外側はやや明るい		
7	土器器 壳	高さ(復元) 口縁部径 (復元径)	23.3 15	口縁部は「く」の字 にひき、内湾気泡 に立ち上がり、口唇 部で外反する	外面 上半を縦位置の刷毛目調整。 その後下半を斜位主体にて 毛目調整 内面 上半は横位置のヘラ削り。 その後下半を斜位主体にて ヘラ削り	金雲母・角閃石粒・砂粒を多く 含む	
40	8	土器器 壳	残存高 口縁部径	14 13.4	くの字に開く口縁部 に腰部が内湾する 脚部は丸い	外側 口縁部は横ナデ、脚部は 斜削毛・縦位刷毛・複数ナデ 内面 口縁部は横ナデ、脚部は 縦位の重いヘラ削りのあと 複数刷毛	外面は7.5YR 淡黄褐色。黒 斑あり、下半には10YR 黄褐色 褐色主体、内面は10YR 淡黄 褐色、部分的に5YR 橙色の 斑点がある。また黒斑も見ら れる
9	土器器 壳	残存高 口縁部径	8.8 15	外反する口縁部で端 部が収まる 肩は張る	外面 刷毛目調整のあと口縁部 は回転利用したナデ 内面 口縁部は回転利用したナ デ、脚部はヘラ削り	角閃石・雲母粒・石英・白色 砂・赤色砂	
10	土器器 壳	高さ(復元) 口縁部径 (復元径)	22.6 15.5	球体に近い脚部 縫は縦やかに外反し 口唇部内面は不明確	外面 腹部びれ部分下1.5cm まで丁寧な横ナデで仕上げる。 腹部以下は丹念な刷毛 調整	微細の金雲母・角閃石・少量 の砂粒を含む 内外面と6.2.5YR 8/2	
11	土器器 壳	残存高 口縁部径	13 16.5	ナデ肩で脚部が直立 する	外面 刷毛目調整のあと脚部は 横ナデ 内面 斜削のヘラ削り、脚部 は指標によるオサエ	角閃石・雲母粒子・白色粒 子・0.5~0.8mmの大粒混在 灰白色7.5YR 8/2、淡黄褐色 7.5YR 8/3~8/4	
12	土器器 壳 口縁部片	残存高 口縁部径 (復元径)	5 15	縫部が薄く、外反す る口縁部	外面 刷毛目調整のあと要減 内面 縫部は指標によるオサ エ、脚部以下はヘラ削り	角閃石・雲母粒子・白色粒子 外面は5YR 7/8 内面は12.5YR 8/1~ 8/2、黄褐色8/8~7/8	



第43図 矢房遺跡16区土坑墓(1/40)

矢房16区 SX01 (第43図・図版5)

16区検出で住居跡から西へ2m 50cmに位置する。二段墓坑となり、床面にはきめの細かい明茶褐色土が敷いてあつた。規模は上段で長さ2m 70cm、幅1m 40cm深さ30cm以上の長方形で、その中心に長さ1m 89cm、幅48cm、深さ26cmの長方形の埋葬坑を設ける。埋葬坑には北側に南北30cm東西50cmの方形の壇がつくられる。副葬品や供獻土器などは見られない。その規模から伸展葬と考えられる。(竹中)

第10表 矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表③

回	番号	種 別	法 量(cm)	形態的特徴		表面的特徴	胎土・色調	備考
				高さ	口縁部径			
13	土器器 坏	(復元径)	6.9 口縁部径 腹部最大径 16	口縁端部が丸い	外表面 ヘラ削り 全体的にナデ調整	微量の金雲母・角閃石を含む 橙色5YR 6 / 8		きめの細かいしっかりした胎土
14	土器器 坏	残存高 口縁部径 [口縁部片] (復元径)	4.4 13.2 13	芯部は内消する口縁 下はミガキのあとヘラ削り	外表面 口縁部はナデ、中位以下はミガキのあとヘラ削り 全体的にナデ調整	雲母粒子・赤色砂が多い にぶい褐色7.5YR 6 / 4 - 6 / 3		
15	土器器 小型体	高さ(推定) 口縁部径	7.5 13	壊とする形態より深く、底盤にかけて突起がある 壊とする	外表面 全体的に軸力で行なわれたあと、長いストロークでヘラ削り 内表面 口縁下3.5cm程まで横ца 外表面 ナデ削りのあと口縁部 内表面 壊方向のナデ仕上げ	金雲母・角閃石・白色砂を多く含む 灰白色5YR 8 / 2を基調とする ナデ、それ以下の不正確なヘラ削り	外表面からの穿孔2ヶ所あり (残存部)	
16	土器器 坏	高さ 口縁部径 深さ	6.8 20 6.3	外反する口縁部に端部が反る	外表面 ナデ調整のあと口縁部は水牛なヘラ削り 内表面 底盤は左回転方向に放射状ナデ、口縁部は横ナデ	雲母・白色砂・赤色砂・角閃石 外表面橙色2.5YR 6 / 5 ~ 6 / 8 内面にぶい褐色7.5YR 7 / 3	精製された生地で、外表面の仕上がりは赤い 口縫部はナデ調整が見られる	
17	土器器 坏	高さ(復元) 口縁部	6.7 17.6	丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する	外表面 直面は不定方向のヘラ削り 口縁部下より横削りヘラ削り 内面 底盤は左回転方向に放射状ナデ、口縁部は横ナデ	微量の金雲母・角閃石・砂粒を含む にぶい褐色7 / 4		
18	土器器 有台坏 脚部のみ	残存高 脚部幅外径 脚部幅高さ	3.6 8.7 2.5	芯部は壊に対して小ぶりな脚でつくり (調節・成形)があまりよくない点	外表面 指壓によるオサエと横ナデ、壊部との接合はナデ 内面 刷毛による調整のあとナデ	赤色砂粒・角閃石・石英・白色砂 内面は浅黄色5YR 8 / 3 ~ 8 / 4、脚外側は褐色5YR 7 / 8		
19	土器器 口縁部	残存高 口縁部径	6.3 16 以上	口縁端部が外反する 5cm後半以降に見られる壊である	外表面 口縁部は刷毛のあと横ナデ、脚部は刷毛、脚部は横ナデ	目的の細かい胎土であるが、金雲母・角閃石も含む、また白色砂(0.2~0.3mm角)が目立つ 内面 口縁部下半は横刷毛、上半は横ナデ、脚部はヘラ削り	刷毛目、何度と止めながら調整している 外表面は二次的な力を受け黒度が見られる、灰白色7.5YR 8 / 2	

第6章 古代

第1節 土坑・溝・骨蔵器

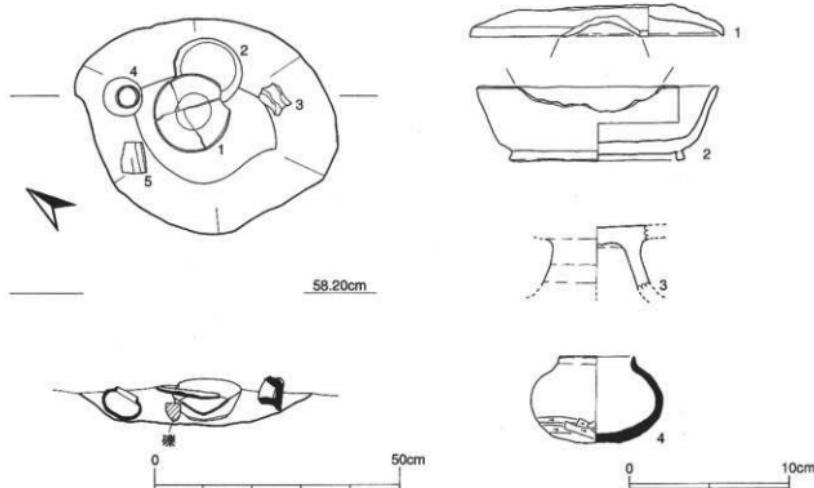
石原遺跡では古代の遺構として、土坑や土坑状の落ち込みに土器片や完形品に近い状態の土器が入り込んだ状態で検出されている。ここではそれらを中心に紹介する。

石原8区Pit01 (第44図 図版5)

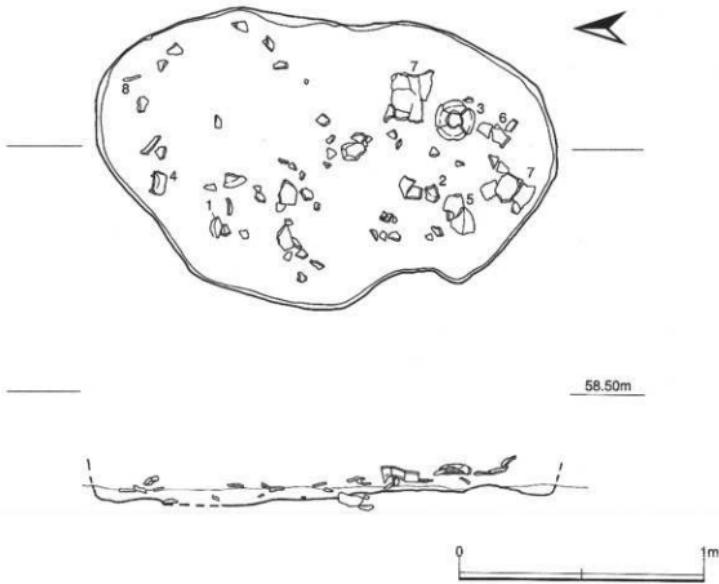
南北55cm、東西43cm、深さ20cmを測る不正円形を呈する小土坑である。覆土からは完形品(1・2・4)と3や5のような破片との二種の状態の遺物が検出された。破片で検出された遺物においては、埋没過程で入り込んだ可能性が高く、土坑に伴う一括遺物は1・2・4と考えておきたい。特に5は実測図を示さなかったが古墳時代に属する壺の口縁部片である。土坑北より検出された1・2は蓋と身を合わせた状態で検出され、見通し図にみると身は縁により支えられた状態で検出されている。4も口を上にした正位置で検出されており両者は土坑内部に安置されたままの状態で現在に至るものと考えておきたい。特徴的な点は1・2や4共に口縁部を打ち欠いて「口」を作り出している点である。出土状態では蓋が反対方向にずれていた。5は4の蓋として用いられたと考えられる。(竹中)

石原8区Pit01出土遺物 (第44図・第11表・図版21)

1は土師器壺蓋で2の土師器高台壺とセット関係で出土している。口縁部は断面三角形状を呈し、かえりはほとんど見られない。口縁部に意図的な幅約6cmの切込みがみられる。2は土師器高台壺で体部は直線的にやや外反気味に開き、高台は断面台形状を呈する。貼付高台でやや外傾する。3は土師器高壺の脚部片である。壺部が極端に水平に開くタイプのものであろう。4は須恵器小型壺で、体部は丸く、底は平底であり、口縁部が短く直立する。口縁部は、一部打ち欠かれている。図版21-4)



第44図 石原遺跡8区Pit01-出土遺物(1/10-1/3)



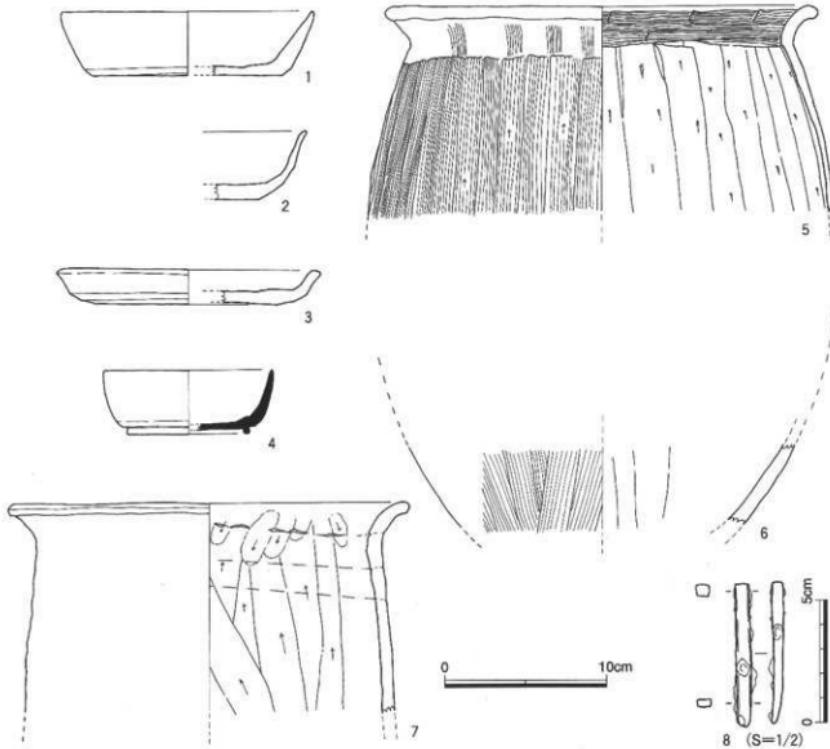
第45図 石原遺跡8区SK01(1/20)

石原8区SK01（第45図・図版5）

長軸約1m88cm、短軸約1m18cmを測る平面プランは南北に長い梢円形を呈する土坑である。底面はやや北側に下る程度で平坦である。深さは約5cmと浅いが、遺物は南側を中心に分布している。遺物は南側に比較的まとまった状態で出土しており、3はほぼ完形品であり、5・7などは壺洞部片であり比較的大きな破片に復元できた。8は鉄製品であり、その形状から釘と考えられる。1や4などが分布する北側には5cm大の破片資料が多く検出され、北側と南側とでは埋められる過程が若干異なる様子である。しかし、多くの時間を隔てているものではないと考えておきたい。特に3は中央を打ち欠かれた状態の完形品で出土しており、土坑の埋没時期に近い年代を示すものであろう。（竹中）

石原8区SK01出土遺物（第46図・第11表・図版22）

1は土師器坏で破片資料による復元実測である。底面は右回転を利用したヘラ削りによって調整されており、体部下位まで及んでいる。体部から口縁部にかけては横ナデによる器面調整である。内面は横ナデが見られるが、粘土粙の痕跡が凹凸になっている。2も土師器坏で破片資料による復元実測である。これも底面から体部下位にかけて回転利用のヘラ削りで、口縁部から体部までは横ナデである。器壁が薄く、口縁部が外反する点が特徴である。3は土師器坏で完形品であるが、底部中央が意図的に約5cmの円形に打ち欠かれている。4は須恵器高台坏で、高台部が細く低い特徴をもつ。口縁部は直立して、端部は細く丸い。5は土師器壺で口縁部は丸く外反し、端部は水平になる。胴部は口縁部径よりやや大きく膨らむ形態で、長く伸びる。6は土師器壺下半部分で、5と同一個体と思われる。



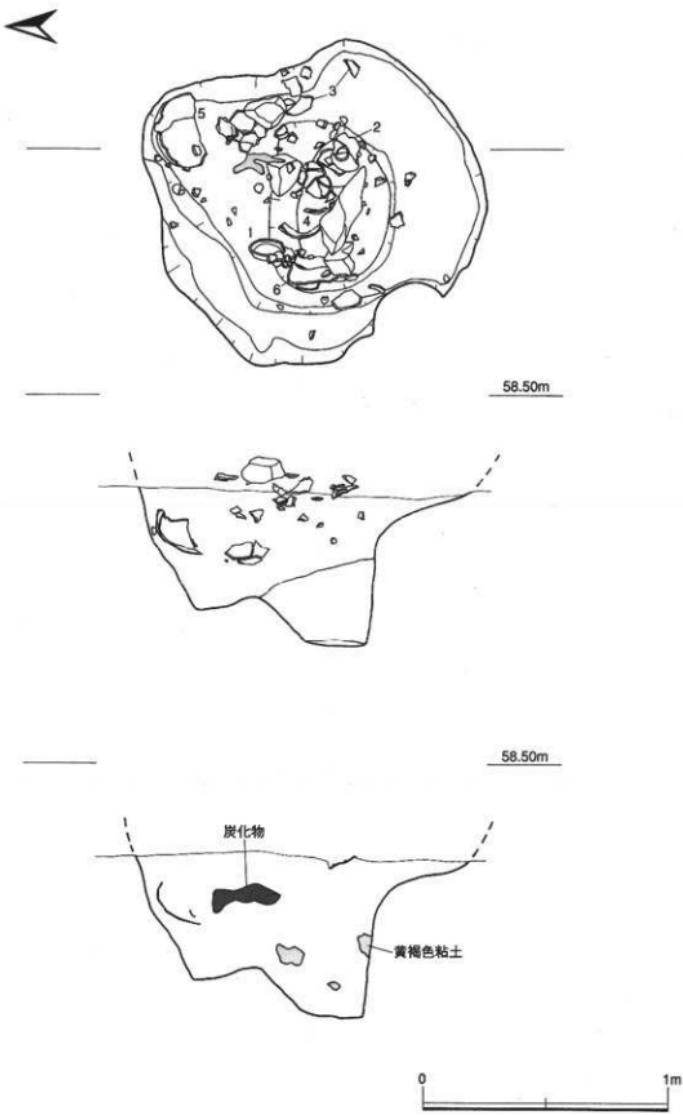
第46図 石原遺跡8区SK01出土遺物(1/3・1/2)

7は土師器甕で口縁部が水平に開き、胴部最大径は口縁部径より小さくなり、長胴となる。8は棒状の鉄製品で断面方形幅6mm厚さ4.5mm長さは5.7cmをはかり、一端は薄く作られる。釘か? (竹中)

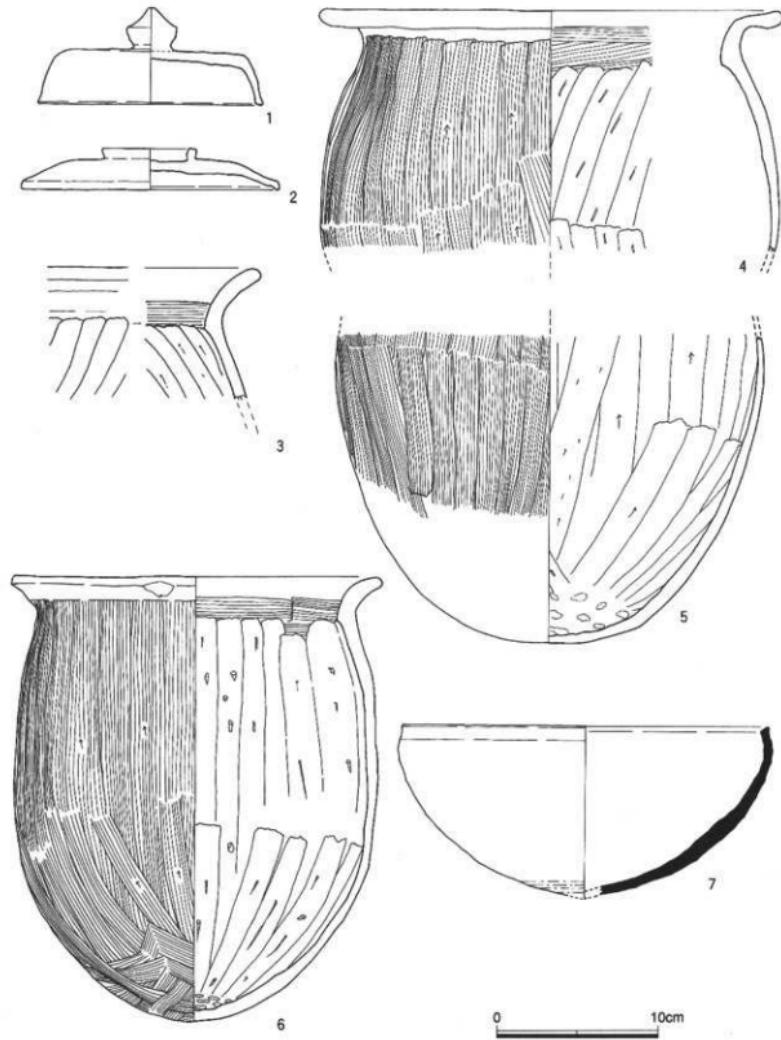
石原8区SK02 (第47図・図版5~6)

南北1m45cm、東西1m39cm、深さ65cmを測る不正円形を呈する土坑である。中央部に南北52cm東西68cmの一段深い落ち込みがあり、南側の掘り込みは垂直に近い。実測図では落ち込みには遺物や礫などが入り込んでいないようにみえるが、遺物や礫などはその落ち込み内部の覆土からも検出されている。いずれにしても出土遺物は土坑の埋没に伴う際のものと考えられ、土坑の埋没時期を示すものである。特に1や2は完成品に近い形で出土しており、両者のレベル差 ($2 = 58.102\text{m}$, $1 = 57.788\text{m}$) は31.4cmを測り、土坑上部では南側を中心に遺物が集中している。しかし、下部では落ち込みを中心とした遺物の集中となる。そのため南側から土砂とともに一括に廃棄されたものと考えておきたい。また、土坑覆土には炭化物と特徴的な黄色粘質土が検出されており、黄色粘質土は落ち込み内部のみから検出されている。

(竹中)



第47図 石原遺跡 8区 SK02(1/20)



第48図 石原遺跡8区SK02出土遺物(1/3)

石原8区SK02出土遺物（第48図・第12表・図版22）

1は土師器坏蓋で高い宝珠つまみをもつ。天井部はほぼ水平になり、つまみはその中心につけられる。口縁部は直に落ち、口縁端部は隅丸台形である。2は土師器坏蓋でリング状のつまみを有する。端部はすべて丸くなる。3は土師器壺口縁部の破片資料である。外反する口縁部で、端部は隅丸台形である。4は土師器壺で口縁部は強く「し」字に外反し、端部は水平に広がる。胴部の張りは弱く、

胴部最大径は口縁部直径とほぼ等しくなる。5は土師器壺胴部下半で、上半が失われたのみで割れずに出土している。外面下部は刷毛調整が磨耗しており、内面には円形に剥落した痕があり、火にかけられて使用されたことが考えられる。6は土師器壺で半分のみが残る資料であるが、口縁部から底部まで残存しているため、復元実測した。口縁部は丸く外反し、5と同様に口縁部内面には横位の刷毛調整が施される。7は須恵器鉢で口縁部が内湾し底面が丸みを帯びているが、底部は失われている。15cm角の破片資料である。

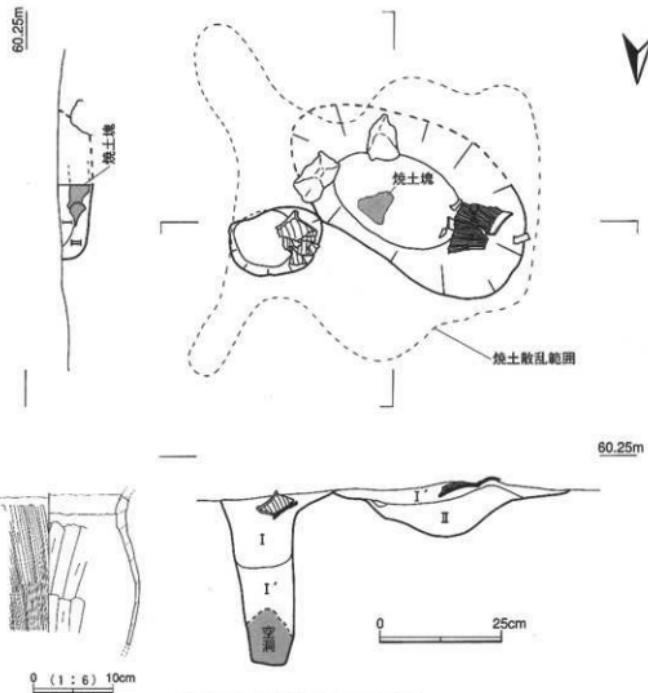
(竹中)

石原24区 SK01 (第49図・図版6)

検出面では焼土が散乱した状態(図の点線部分の範囲)であったが、掘り下げると長さ約60cm、幅約45cmの東西に長い楕円形土坑と確認できた。さらに北東側に直径約30cm深65cmピットが付属していた。土坑には内部中央や西北東よりに焼土塊が底面よりも高い位置で検出され、土坑底面には熱を受け硬化した土は確認されなかった。遺物は焼土よりも上位で確認された。土坑南西側には二つの礫が存在するが、意図的に配置したものではなく、土層中に存在した礫である。ピットは下部が空洞と

第11表 石原遺跡8区 Pit01・SK01出土土器観察表

回収番号	種別	法量(cm)	技術的特徴	胎土/色調	備考
44	1 土師器 壺蓋	高さ 1.95 口縁部径 15.8	外面 回転利用の横ナデ 天井部分のみ回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	砂粒・赤色粒を少量含む 内外面ともに赤褐色 外面一部淡灰褐色	口縁部に切り込み
	2 土師器 高台付壺	高さ 4.6 口縁部径 14.8 高台径 10.7 高台高 0.65	外面 口縁部から胴部は回転利用の横ナデ、高台はナデ、底部は回転ヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	石英を微量、1~5mmの砂粒を少量含む 内外面ともに淡赤褐色	口縁部に切り込み
	3 土師器 高壺 脚部片	残存高 4 脚基部径 5.4	外面 回転利用の横ナデ 内面 非常に丁寧な回転利用の強い横ナデ	白色粒(15mm角)・角閃石(0.1mm以下)・赤色粒(12~13mm角) 内外面とも淡い明るいクリーム色、脚外面は明るい赤褐色土	欠損品
46	4 須恵器 小型短頸壺	高さ 5.3 口縁部径 4.6 底部径 2.9	外面 回転利用の横ナデのあと胴下部は手持ちのヘラ削り 内面 横ナデ	繊維を微量に含む 内外面ともに淡灰褐色	
	1 土師器 壺	高さ 3.9 口縁部径 15.8 底部 11.8	外面 全体に回転利用の横ナデ、底部は右回転のヘラ削り 内面 口縁部から胴部に回転利用の横ナデ	白色粒・角閃石粒・雲母 浅黄橙色10YR 8/3~8/4	
	2 土師器 壺片	高さ 4.2	外面 口縁部はナデ、胴部から底部に右回転のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	白色粒・雲母粒子 浅黄橙色10YR 8/3~8/4	
46	3 土師器 壺	高さ 2.1 口縁部径 16.4 底部径 11.3 深さ 1.3	外面 回転利用の横ナデ、胴部以下は回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	白色粒子・赤色粒・雲母 橙色5 YR 7/6~7/8	口縁部は3ヶ所欠けている。底部は外面より打ちぬかされている
	4 須恵器 壺	高さ 3.9 口縁部径 10.6 (復元径) 8.3	外面 回転利用の横ナデ。底部は回転利用のヘラ削り 内面 細いヘラ削り	白色粒・角閃石・雲母粒 橙色2.5 YR 7/6~7/8	底部外面より打ち欠かれしており、およそ半分が残り、他は残っていない
	5 土師器 壺	残存高 17.5 口縁部径 26 (復元径)	外面 脱部以下は縱方向の刷毛調整 内面 口縁部は横方向の刷毛調整、脱部以下は縱方向ヘラ削り	白色粒・角閃石・雲母粒 浅黄橙色10YR 8/3~8/4	6と同一個体
	6 土師器 壺	残存高 5	外面 縦方向の刷毛調整 内面 縦方向のヘラ削り	白色粒・角閃石・雲母粒 浅黄橙色10YR 8/3~8/4	5と同一個体
7	土師器 壺	残存高 12.5 口縁部径 25.8 (復元径)	外面 全体に不定方向のナデ調整 内面 口縁部に指顎オサエ、胴部はヘラ削り	角閃石・白色粒・雲母粒 にぶい橙色6/3~6/4	

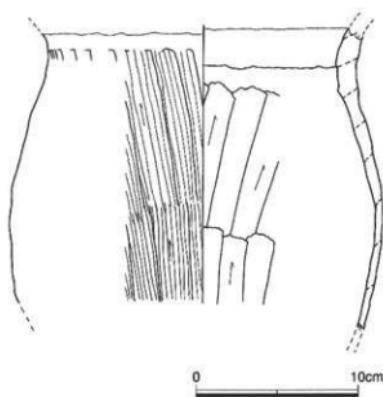


第49図 石原遺跡24区 SK01(1/10)

なっており、その上に土坑上位の覆土が確認された。遺物は最上位で確認されたのみである。覆土は土坑・ピットとともに共通するもので、堆積状況と切り合いから、土坑の埋没にともないピットが掘り込まれ、その後すぐにピットも埋められた状況に復元できた。出土遺物は両者ともから同一固体の甕（口縁部が無く、胴下部が失われている）が1点検出されたのみである。甕にはススが多く付着しており、土坑内部の焼土塊と密接な関係を有するものと考えられる。

石原24区 SK01出土遺物（第50図・第12表）

土師器甕上半部分で全周するまで復元できたが、口縁部と胴部下半分は失われている。胴中位が比較的張り出しており特徴的である。口縁部はゆるく外反するものと推定される。（竹中）



第50図 石原遺跡24区 SK01出土遺物(1/3)

矢房遺跡火葬墓（骨蔵器・壺の集中出土）（第51・52図・第12表・図版23）

第52図は矢房遺跡4区で検出された土器群である。遺構出土品ではなく、後世に寄せ集められたものが土坑中にいれこまれたものである。写真的状態（第51図）より掘り下げるにビニール片が出土したため判明。遺物には同時代的様子が強く、一括もしくは複数の火葬墓があったものと考えておく。

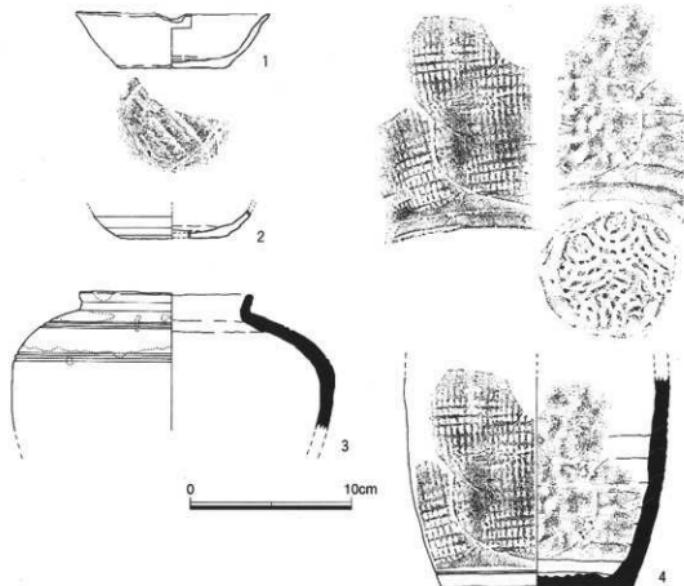
1は土師器壺で底部外面に回転ヘラ削りのあとヘラで押さえている。小型の壺で口縁部は大きく開き、端部が鋭い。胎土は精製されている。2は土師器壺底部片であり、口縁部は失われている。これ

も小型の壺であるが、1とは底部調整が異なり、回転ヘラ削りのままである。3は須恵器壺（骨蔵器）で内面は斑点状に表面が剥落している（焼成時の剥落）。外面上部に自然釉がかかり、内部が小豆色となる。胎土や色調から荒尾産であろうと思われる。4は須恵器壺胴部から底部片である。ほぼ全周するまでに破片が存在し、上半は失われている。格子目叩きそのあと内面ナデ、底部は円盤状の粘土板を貼り付けている。4内部に入っていた土中から少量の骨粉が検出された。

（竹中）



第51図 矢房遺跡4区骨蔵器検出状況写真



第52図 矢房遺跡4区出土遺物(1/3)

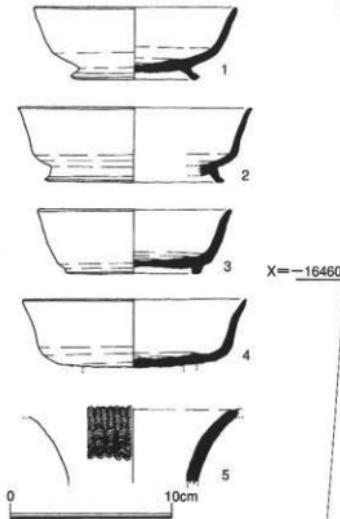
矢房12・13区 SD01 (第53・54図・図版7)

検出延長15m, 主軸は北北西向きで、幅は2m以上の部分もある。底面レベルは南端52.595m北端52.779m、北から南へ傾斜する。覆土は砂礫混入土で、遺物は底面に付着するように検出されたが、すべて破片資料である。一時的な土石流によって形成された溝状遺構である。また、SD01と交差するように細い溝状の掘り込みが検出されている。覆土はSD01と同様であり、同時期に埋没したのであろう。

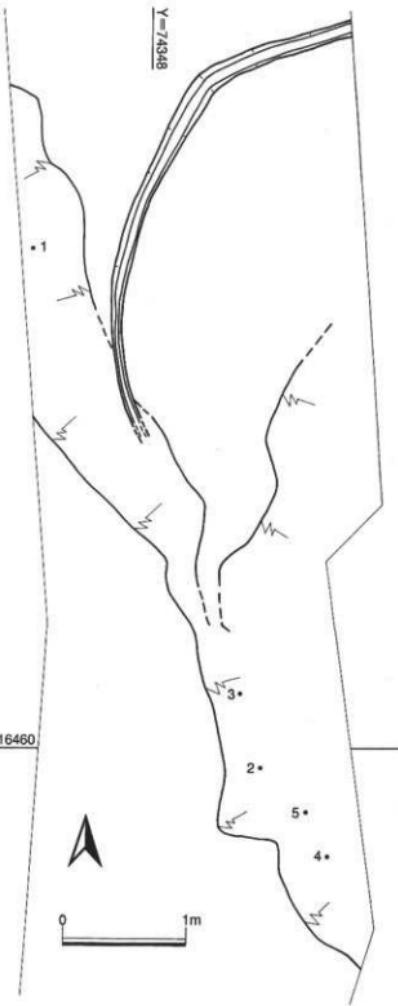
(竹中)

矢房12・13区 SD01出土遺物 (第53図・第12表)

出土遺物はいずれも完全な形で残っておらず、すべて復元実測である。1は比較的深めの形態で、高台直径に対して口縁部直徑が大きくなり、口縁部の立ち上がり角度は2~4と比べるとゆるい。丸底を呈した高台上部1cmほどで立ち上がりの傾斜が変換する。この変換点以下で回転を利用したヘラ削りが施されている。高台は豊み付け部分が外側に開く。2も同じく高台上部1cmほどで立ち上がりの傾斜が変化する。この変換点以下に回転利用のヘラ削りがみられる。3と4は平底となり、高台が短く、口縁部の立ち上がりの傾斜が1や3と比べ急である。5は壺の頭部である。(竹中)



第53図 矢房遺跡12~13区 SD01出土遺物(1/3)



第54図 矢房遺跡12~13区 SD01(1/40)

第12表 石原遺跡8区SK02・24区SK01、矢房遺跡4区・12~13区SD01出土土器観察表

図面号	種別	法量 (cm)	様式の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 蓋	高さ 口縁部径	13.9 16	外面 回転利用の横ナデ、天井部分 は回転ヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	繊粒、2~3mmの砂粒を少量含む 外画は赤褐色 内面は淡赤褐色	
2	土師器 蓋	高さ 口縁部径	2.5 16	外面 ヘラミガキによって滑らかに 仕上げる 内面 回転利用の横ナデ	微量の金雲母・角閃石、また1~5mm程度の砂粒が多い 外画は2.5YR 5/6 内面は5YR 5/6	
3	土師器 甕 口縁部片	残存高	8	外面 口縁部横ナデ 胴部刷毛調整	雲母粒・角閃石・石英などの白 色繊(2mm大) 明白灰色~明褐色、白っぽい	
48	土師器 甕	残存高 口縁部径 (復元径)	15 27	外面 頭部まで横刷毛、口縁部は横ナデ、胴部刷毛調整は二段階 内面 頭部は横刷毛、胴部以下は二段階の縱方向のヘラ削り	角閃石・金雲母・砂粒(1~3mm) 外画はHve10YR 7/6、部分的に赤運有り 内面はHve10YR 8/4	5とは別個体と思われる
						4とは別個体と思われる
5	土師器 甕	残存高	18.5	外面 段階的な縱方向の刷毛調整 内面 段階的な縱方向のヘラ削り	外画はHve10YR 7/6 内面はHve10YR 8/4	4とは別個体と思われる 外面に部分的に赤運有り
6	土師器 甕	高さ 口縁部径 (復元径)	27.2 22.6	縱方向の刷毛調整のあと、底 部を中心に放射状に刷毛調整、 口縁部は横ナデ 内面 横刷毛のあとヘラ削り	雲母粒・白色繊(5mm大、3mm 大)・角閃石 内面は赤褐色~暗赤褐色、底部は 黒褐色、外画は赤褐色~暗褐 色	外画では口縁部下よりス スが付着する、底部にもス ス付着、底部に刷毛調整痕えかかる 内面中央に円形の剥落あり
7	須恵器 鉢	高さ(推定) 口縁部径 (復元径)	10.5 22.8	胴上部は回転利用の横ナデ、 胴中部は回転ヘラ削りのち回 転利用の横ナデ、胴下部は回 転ヘラ削り 内面 不定方向のナデ	外画ともに砂粒を微量含む 外画口縁部は茶褐色、体部上位 は淡灰褐色、体部中位~底部は 灰褐色、内面は灰褐色	外画ともに全体的に自 然釉(気泡状)かかる
50.1	土師器 甕	残存高	18.4	外面 胴部は段階的な縱方向の刷毛 調整 内面 口縁部は横ナデ、胴部は段階 的な縱方向のヘラ削り	角閃石・赤色粒・白色粒が目立 つ 外画が5YR 5/3 内面が7.5YR 3/3	口縁部以上と胴部下半は 欠損
52	土師器 小型壺	高さ 口縁部径 底部径	3.4 11.9 6.4	外面 底部は回転ヘラ削りのあとヘ ラで押している 内面 回転利用の横ナデ	赤色粒子・石英・白色小繊・雲 母粒子 外画ともに、ぶい橙色5YR 7/4~7/3	胎土は精製されている
53	土師器 小型壺	残存高	1.6	外面 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	雲母粒子・白色粒子 外画は褐色5.5YR 4/1、黑 褐色7.5YR 3/2 内面はぶい橙色7.5YR 7/4	1と比べ難なつくりであ る 胴部と底部の間に段をも つ
1	須恵器 壺	残存径 高台径	8.4 10.5	外面 回転利用の横ナデ 回転を利用した2条の沈線を二 段に施す 内面 回転利用の横ナデ	白色粒子が多く、隙間が多い 灰色N 6/4~4/ 内部はHue10R 5/1	内面は斑点状に表面が剥 落している(焼成時によ るもの) 外面上部に自然釉かかる
2	須恵器 壺	残存高	1.6	外面 回転利用の横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	白色粒子が目立つが他の混入物 は少ない 外画ともに灰褐色7.5YR 6/1 ~4/1	底部は円盤状の粘土板で 同心円印きである 底部に円筒状の胴部を接 着している
3	須恵器 背負器	残存径 口縁部径 (復元径)	8.4 10.5	外面 回転利用の横ナデ 内面 回転を利用した2条の沈線を二 段に施す 内面 回転利用の横ナデ	雲母、白色粒子、黒色粒子 外画 Huen 5/~/6/ 内面灰白 Huen 7/	
4	須恵器 壺底部	残存高 底部径	13 11.6	外面 格子目印きのあと不定方向の ナデ 内面 指頭オサエ。底部付近は指ナ デ	白色粒子が目立つが他の混入物 は少ない 外画ともに灰褐色7.5YR 6/1 ~4/1	
5	須恵器 壺	高さ 復元口縁径 高台径	4.45 12.6 8	外面 回転利用の横ナデ 脱下部は 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	雲母、白色粒子、黒色粒子 外画灰褐色 Huen 5/~/6/ 内面灰白 Huen 7/	
6	須恵器 壺	高さ 復元口縁径 高台復元径	4.6 14.4 11	外面 回転利用の横ナデ 脱下部は 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	白色粒子、黑色粒子 外画灰褐色 Huen 7/ 内面灰白 Huen 5Y 7/1	
7	須恵器 壺	高さ 復元口縁径 高台復元径	4 12 8.4	外面 回転利用の横ナデ 脱下部は 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	雲母、白色粒子、黑色粒子 外画灰褐色 Huen 5/ 内面灰褐色 Huen 6/	
8	須恵器 壺	高さ 復元口縁径 高台復元径	4.2 13.8 8	外面 回転利用の横ナデ 脱下部は 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	雲母、白色・黒色・赤色粒子 外画外画ともに灰褐色 Huen 7.5Y 7/ 1	
9	須恵器 蓋	残存高 口縁部片	4.5	外面 回転利用の横ナデ 細かい鉛拂波状文 内面 回転利用の横ナデ	角閃石、雲母、白色・黒色粒子 外画灰褐色 Huen 6/~/4/ 内面灰褐色 Huen 6/~/5/	内部は小豆色の仕上り

第7章 中世

第1節 土坑・製鉄炉

矢房3区SK01 (第55図・図版7)

南北方向に主軸を持つ、平面プランは隅丸方形を呈する東西93cm南北1m25cm深さ71cmの土坑である。底面も同様に隅丸方形となり、東西74cm南北1mを測る。覆土は二層に分層され、南北方向のセクションでは北側から南側への傾斜が確認される。遺物はすべて覆土中に浮いた状態で検出されたものがほとんどである。特に上層下部に集中しており、平面図およびセクション図に見るように北側から南側へ傾斜する傾向にある。図示した遺物は古墳時代の土師器壺口縁部片が多く、下層の堆積後に上層とともに土坑内に入り込んだ遺物であろう。そのため、これらの遺物で年代を決定することは難しいと思われる。また、形態的に56ページで紹介する矢房遺跡9区SK01に類似しており、糸切り皿などの年代の所産と考えておきたい。

(竹中)

矢房遺跡9区検出の土坑・配石

9区SK01 (第56図・図版8・巻頭図版④)

調査区北端において長軸83cm、短軸68cm、平面は隅丸長方形を呈する土坑を検出した。検出面では砂が一面覆っていた。深さは約45cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。底もほぼ同様な隅丸長方形であり、底面では凹凸が確認される。内部には人頭大の礫（角閃石安山岩）が落ち込んでおり、礫下より土師器小皿が4点（1～4）と15cm大の礫1点がまとまって検出された。いずれも土坑中央南側に偏っており、検出レベルは1=50.748m, 2=50.76m, 3=50.75m, 4=50.772m, 5=50.865mを測り、土坑底面と比べ5cm以上の差がある。さらに土師器の傾きは底面を下にして据えてあったものが落ち込んだ様子を示しており、すべてが完形品に復元できたため、極めて一括性の高い検出状況である。5は、礫の中より2

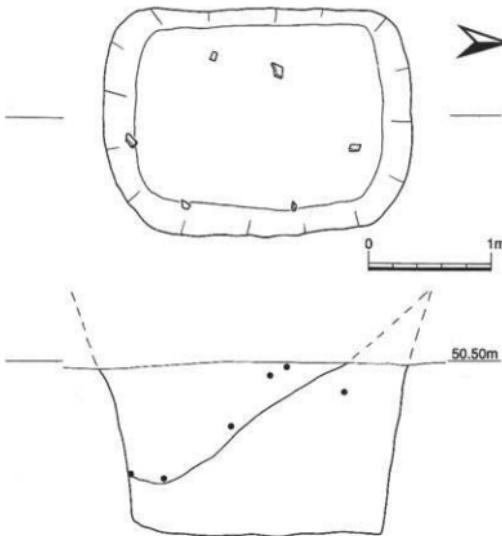
分された状態で別々の地点から出土したもののが接合品である。1～4は、礫直下よりまとまった状態で出土し、その直下には礫1点が1～4に接して検出されている（図版8）。礫1点は雲仙産の角閃石安山岩で、底面直上で検出された。これも土坑内部に落ち込んだのであろう。木棺等の上に土師器（1～4）がそれら礫が被せられ、5が2分され礫の上に散布され、長い時間が経過し土坑内部の空間に落ち込んだものと考えられる。

(竹中)

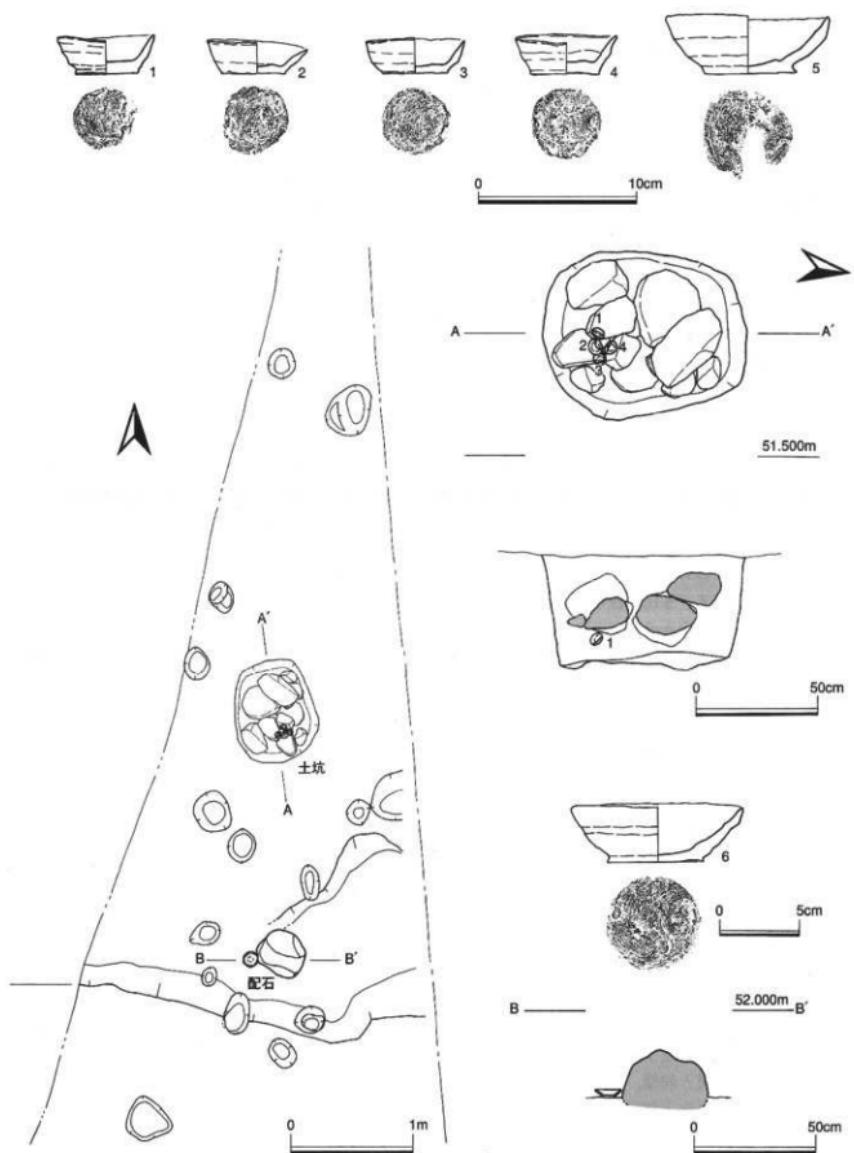
矢房9区配石 (第56図・図版8・巻頭図版①)

土坑南約1m35cmの位置に50cm大の角閃石安山岩があり、その西脇に接して完形品の土師器皿1点が検出された。検出面では土坑と同様、砂が被覆していた。検出された土師器小皿は土坑内部に落ち込んでいた1点（5）と技法的にも形態的にも類似するもので、胎土などもほぼ同じである。

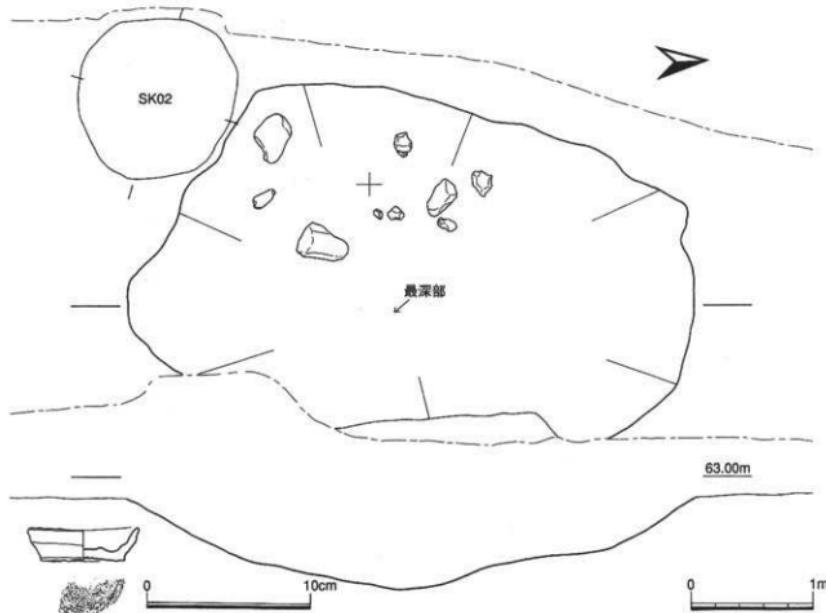
(竹中)



第55図 矢房遺跡3区SK01(1/20)



第56図 矢房遺跡9区SK01・配石・出土遺物(1/40・1/3)



第57図 石原遺跡19区 SK01・出土遺物(1/40・1/3)

矢場9区 SK01・配石出土遺物 (第56図・第13表・図版23・巻頭図版4)

5のみは底部が一部失われるが、他はすべて完形品である。1～4は同一技法による同一形態の小皿である。いずれも外面は横ナデによる3段ほどのゆるい窪みをもっている。5・6は1～4と同一技法によるが、形態的に一回り大きくつくられる。これも同様に外面に横ナデによる3段ほどのゆるい窪みをもっている。胎土・焼成も共通しており、おそらく同一時期に同一集団によってつくられた一群と考えられる。又、5は意図的に二分された状態で検出しており、1～4と比べ大きさも異なるので、葬送儀礼に際して、土師器皿の大小差によって、何らかの規制が設定されていた可能性が高い。

(竹中)

石原19区 SK01 (第57図・図版8)

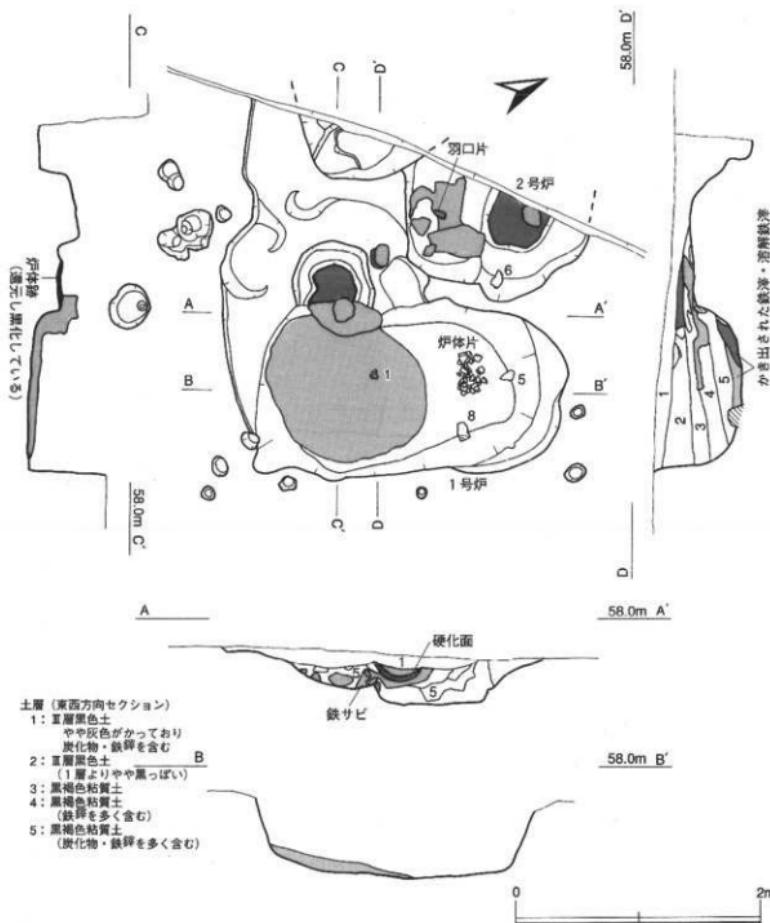
東西方向に長い不正楕円形プランで、中心部分に向かってゆるく傾斜する土坑である。矢印部分が最深部で、深さは60cm、東西2m80cm南北4m60cmをはかる。人頭大の礫が南西側を中心に分布し、遺物はすべて浮いた状態で出土している。出土品には第57図左下に図示した他に、須恵質の擂鉢片がある。

(竹中)

19区 SK01出土遺物 (第57図・第13表)

破片資料による復元実測である。1は底部に糸切り痕が残る小皿で、口縁部は二段階に横ナデが施されている。

(竹中)

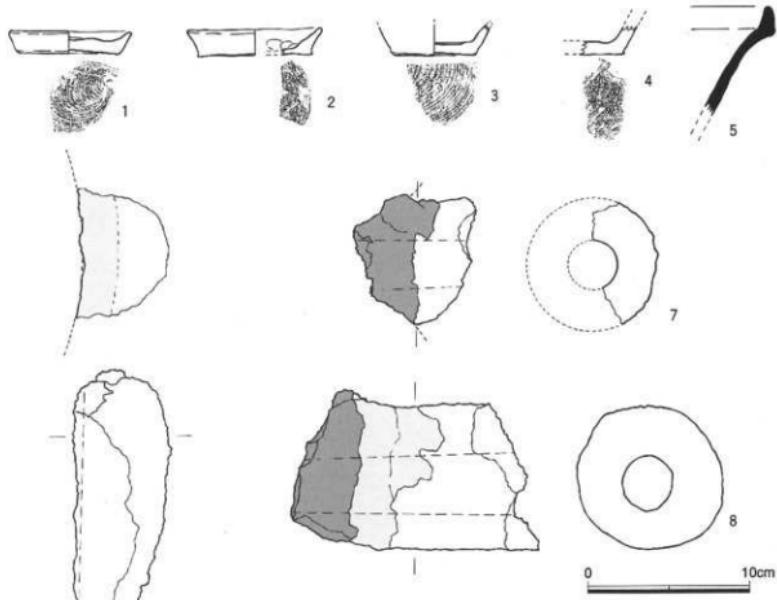


第58図 石原遺跡10区 SK01 一製鉄炉— (1/40)

石原遺跡10区 SK01 一製鉄炉— (第58図・図版9)

二基の製鉄炉が重なっており、切り合い関係より北側のものを2号、南側のものを1号とする。

1号炉: 主軸 (N-66° - 西) で西側にかき出している。炉跡は直径約64cm幅約20cmの円形の窪みとその中に焼土が円形 (直径約40cmに復元) に充填していた。炉西側に設けられた約30cmの段差を有した一段低い平坦面は長軸 2m50cm短軸 1m30cmの長辺円形をしており、炉すぐ西脇の直径 1m30cm の範囲に鉄滓や溶解した鉄滓が散布していた。炉西側のかき出した付近には完形品に近い土師器小皿 (1) 1点が出土し、その北側で輪の羽口 (8) と輪羽口破片や炉体片が粉砕された状態 (復元は未定) で検出され、その北側で須恵器鉢口縁部 (5) が出土している。いずれも浮いた状態で検出さ



第59図 石原遺跡10区 SK01出土遺物(1/3)

れ、炉を廃棄する際に埋め込まれた土砂と共にこれらの中も入りこんだものと思われる。

2号炉：半分程度の検出となったが、これも炉本体の下部構造とかき出した一段低い平坦面とが確認されている。炉本体は直径約50cmほどで、その南側の一段低い平坦面からは、大量の鉄滓とともに被熱した角閃石安山岩や溶解した鉄が付着した礫（角閃石安山岩）が多く散布している。炉体片（6）が台部の東側より浮いた状態で検出されている。また、南側のかき出した部分から羽口1点（実測図には図示していない）を確認している。1・2号炉より復元される炉の構造は、平坦な高さの異なる2段の作業面を造成し、その段差を利用して製鉄炉（径60~50cm）本体をおき、高い作業面は送風構造として、低い作業面は、廃滓場として利用していた様子である。
(竹中)

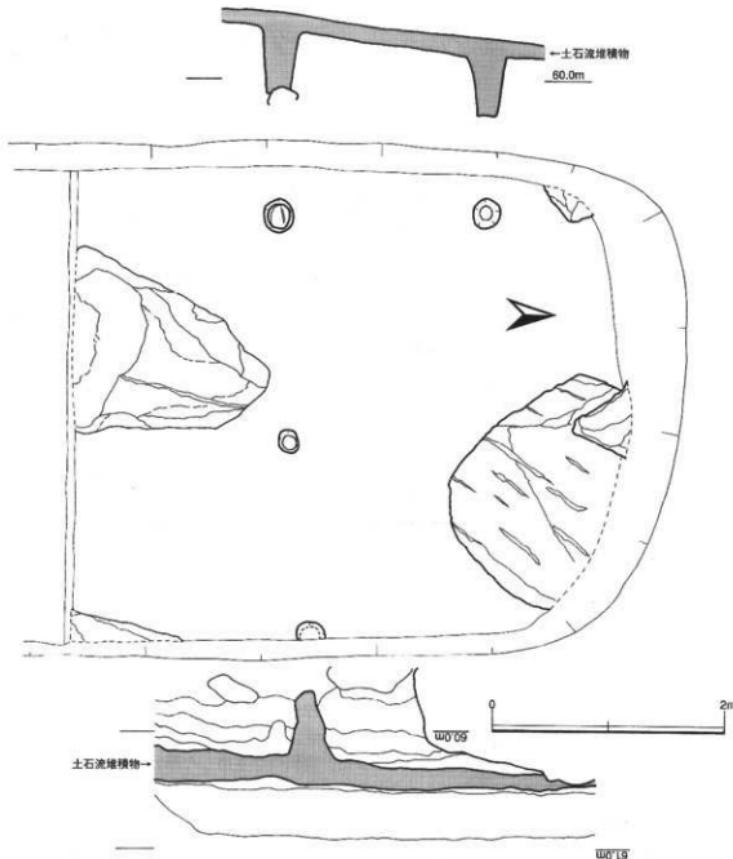
石原10区 SK01出土遺物 (第59図・第13表・図版24)

いずれも破片資料による復元実測である。1・2までは土師器小皿、3・4は土師器杯である。いずれも底面の処理は糸切り離しのままである。5は須恵質の鉢の口縁部で、おそらく擂鉢であろう。

6は炉本体部分の壁片で、点線より内側の部分は被熱により硬化しており、内面には溶解した鉄分が付着している。復元では内径約40cmの炉に復元できる。7・8は爐の羽口部分であり、いずれも炉本体に接続する口の部分に当たる。溶解した鉄滓が付着しており、内部は被熱により硬化する。
(竹中)

第13表 中世土器杯・皿法量計測表

遺跡	遺構	図番号	口径	高さ	底径
矢 房	9区 SK01	第56図1	6.1cm	2.4cm	4.0cm
		第56図2	6.1cm	2.2cm	4.2cm
		第56図3	6.3cm	2.0cm	4.0cm
		第56図4	6.5cm	2.5cm	4.4cm
		第56図5	10.2cm	3.6cm	6.0cm
	配石	第56図6	10.6cm	3.6cm	5.8cm
石 原	19区 SK02	第57図左下	6.8cm	2.1cm	5.0cm
	10区 SK01	第59図1	7.6cm	1.3cm	6.2cm
		第59図2	8.4cm	1.7cm	7.2cm
		24区 Pit列	10.6cm	1.4cm	8.0cm

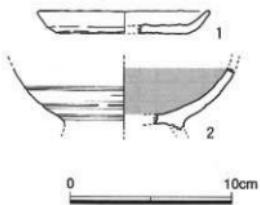


第60図 石原遺跡24区 Pit列(1/40)

石原遺跡24区 Pit列（第60図・図版6～7）

西へ一度触れるが、ほぼ真北に方位を合わせた柱列で、東西方向へ二間、北側へ一間検出されている。柱間はおよそ1m80cmで均一である。覆土には土石流堆積物（砂礫主体）が一様に入り込んでおり、建設途中に土石流に見舞われたものであろう。覆土からの出土品には土師器皿、黒色土器がある。

(竹中)



石原遺跡24区 Pit列出土遺物（第61図）

1はハラ切り底の土師器小皿である。2は黒色土器で、内面のみを黒色処理している。

(竹中)

第61図 石原遺跡24区 Pit内出土遺物(1/3)